

第2章

ビジネスと福音

——パプアニューギニアにおける都市文化の形成とその主体——

はじめに：本章の企図とその背景

パプアニューギニアは19世紀末、白人が到来するまで全土、石器時代にあり、いかなる文明の影響も蒙っていなかった。ということは、パプアニューギニアには白人到来まで都市というものが存在しなかったということの意味する。それでは都市とは何かということが問題になるが、ここでは村落と対比させ、農耕活動から切り離され、食糧はその外から供給される生活者の形作る集住の様式と形式的に定義しておこう。そうした意味での都市の発祥は遠くメソポタミア文明に遡り、アジアやヨーロッパのほとんどの地域は文明とともに都市の歴史を有してきた。すなわち、伝統的都市である。

この伝統的都市というものが、パプアニューギニアには全く存在しなかった。都市は白人とともに、白人近代文明とともにもたらされた全く新しい社会的形態であったのだ。このことが、パプアニューギニアの都市を特徴づける上で最も決定的要因として作用する。この点については、パプアニューギニア都市形成史を見て行く過程で明らかにしていこう。

本章では、紙幅の制約もあり、主として首都ポート・モレスビーを例にとり、他はポート・モレスビーに準拠して論じていくこととする。

パプアニューギニアのどの都市にも共通して言えることだが、その濫觴は白人達が統治と自らの生活のためにつくったコロニアル・タウンにある。初

期においては、それは政府庁舎、郵便局、病院、商店、それに白人達の居住する家屋から成るごくささやかな集落であった。都市と呼ぶにはおこがましいほどつつまじやかな規模の集落であり、主邑ポート・モレスビーにおいても1906年には白人人口は総計69人、第二次世界大戦直前ですら400人ほどにすぎない (Oram [1976a] p.146)。コロニアル・タウンと呼ぶ所以である。こうしたコロニアル・タウンの原型は宗主国オーストラリアの田舎町にあり、そのプランと様式に則って形作られた。都市の青写真がオーストラリアの都市(町)のプランと様式に則って形作られるというこの伝統は、オーストラリア統治時代を通じて、さらに1975年の独立以降も買われることになる。すなわち、パプアニューギニアの都市は近代西洋型の都市として作り上げられていくことになるのである。

さて、パプアニューギニアの都市(コロニアル・タウン)は原住民統治のための行政都市として出発した。ポート・モレスビーにおいては戦前、白人人口の大半は行政官とその家族であったと言われる (Oram [1976a] p.149)。そして、町は徹底して白人の統治と生活のために形作られ、経済活動はそれら行政に仕えるために存在していたにすぎない。すなわち、ポート・モレスビーは官吏と官吏に依存する人間達によって成り立っていたのである。

そこでは、伝統的土地保有部族であるモツ・コイタ族から土地が買い上げられ、原住民を排除する形で白人居住区が作り出された。いわば、ポート・モレスビーはパプアニューギニアの広大な大地の中にぽっかりと浮かぶ近代西洋文明の島社会だったのである。白人居住区には港湾荷役や白人統治の手足となる原住民警官、それに白人の生活を助ける召使いやメイドなど必要最低限の原住民を除いては原住民の立ち入りは禁じられていた (Oram [1976b] p.33)。そうした白人に仕える原住民にも2種類あって、一つは、もともとのポート・モレスビーの土地保有者であるモツ・コイタ族、一つはそれ以外の地域からリクルートされてきた他部族民、そのうち、モツ・コイタ族は自分たちの村から白人居留地に通り、その外の者達は政府所有地に造られたバラック作りの居留地に住んだ (Oram [1976b] p.33)。こうしてポート・モ

レスビーは3種の間人達、すなわち主人である白人、もともとの土地所有者であるモツ・コイタ族、そして、白人統治・生活のためにリクルートされてきた余所の土地からの移入民によって構成されていたのである。それに伴い、町には3種の集落が、すなわち、白人居留地、それをとりまくモツ・コイタ族の村々、そして、移入民のためのバラック作りの居留区から成ることになった。

これが戦前の状況である。

第二次世界大戦の対日戦略拠点を経て、戦後、ポート・モレスビーがオーストラリアの国連信託統治領の首邑になると、ポート・モレスビーは急激に発展を始める。まず、人口が爆発的に増大する。白人人口は戦前の400人から1480人(1947年)へと3倍以上に増え、それに加えてパプアニューギニア人人口が5750人となり、あわせて7230人、もはやコロニアル・タウンを脱しつつあった(Oram [1976b] p.85)。その後も1954年には人口1万5700人、1961年には2万9000人、1966年には4万1850人、1971年には7万6507人と順調に増えてゆき、人口の上からも本格的な都市へと成長していった(Oram [1976b] p.85)。ただし、依然として建造物の大半は木造で二階建て以下であり、その風貌は依然としてコロニアル・タウンの匂いを強く残すものであった。

建造物が木造(あるいはブロック積み)の低層建築から鉄筋コンクリート造りの高層建築へ移行していくのは1970年代初頭、パプアニューギニア人による自治が始まり、1975年、独立を達成していく頃である(その経済的基盤は1972年、ブーゲンヴィル島に開鉱した金銅鉱山、パングナ鉱山である。この年を境に、それまで1:3の割合で輸入超過であった国際収支は一気に均衡を達成する<Shiota [1992] p.104>)。

国会議事堂を中心とする新都心の官庁街ワイガニはこうしたモダンな高層建築が並立し、オーストラリアの首都キャンベラの情景を彷彿とさせるものであった。さらにワイガニの北に新たに造成された郊外住宅地ゲレフは幾何学状に整然と区画され、これもキャンベラ風の住宅と住宅の間のスペースを

十分にとった現代的なデザインを施されていた。

このように、独立国家パプアニューギニアの首都ポート・モレスビーは旧宗主国オーストラリアの首都キャンベラをモデルとして、広い空間に行政・商業・住居・教育といった機能ごとに分化した多数のセンターが散在する計画都市として作り出されていったのである。

だが、問題はパプアニューギニアはオーストラリアではないことであった。こうしたモダンな建築群・住居群は当然、高教育を受け、高収入を得るモダン・セクターに従事する者達やその家族を前提としている。広い都市圏に散在する機能別センターは、その間を自由に移動できる自家用車の持ち主を念頭に置いて造られている。だが、こうした前提は白人や高等教育を受け、官庁や大企業に職を得ているパプアニューギニア人エリートにのみ妥当するものであり、伝統的居住者であるモツ・コイタ族や、今やポート・モレスビー市の人口の8割を占めるに至った首都流入民の多くにとっては全く無縁の前提と言うべきものであった。モダン・セクターから疎外され、排除された低教育（初等教育かそれ以下）・低収入（時として無収入）の首都流入民は同族出身のエリートの家に寄食するか（独立前後から急速に治安が悪化したポート・モレスビーにおいては、こうした寄食者はガードマン代わりになる）、キャンベラに模して広々と取られた空閑地に同族同士が集まってスクウォッター・セトルメントを造る以外に生きるべき道はなかった。こうしたセトルメントでは、あり合わせの木材で壁をつくり、その上に鉄板をのせた貧弱な住居が軒を連ね、水道も、電気も、下水も通じていなかった。

こうして、ポート・モレスビー市には再び、3種の集落が混在することとなった。白人およびパプアニューギニア人エリートのための近代的サブurb、ポート・モレスビー原住民モツ・コイタ族の村々、それに新たに流入してきた低教育、低収入の者達のつくるスクウォッター・セトルメントである。前者はポート・モレスビー市当局、ひいては国家サービスと統御の下に属しているが、スクウォッター・セトルメントは国家や市当局からのサービスと統御の網からはずれ、一種、都市の中の無統制空間を形作ることになっ

たのである。しかも、低教育の流入民にはモダン・セクターへの参入の道は閉ざされ、スクウォッター・セトルメントは犯罪の温床と見なされるような空間となっている。

たとえば、熊谷が1980年に調査を行ったチンブー族出身者のつくるラガムガ・セトルメントにおいては調査対象の成人男子28人中14人が無職であり、残る14名も単純労働者や掃除夫、それに警備員といった低収入かつ不安定な職についている者が圧倒的に多い（熊谷 [1994] pp.163-164）。しかも、1984年の調査では28人中、12人がチンブー州の故郷に帰村しており、文字通り、このセトルメントはチンブー族出身者のポート・モレスビーにおけるたまり場であることが明らかになる（熊谷 [1994] pp.163-164）。すなわち、ラガムガ・セトルメントはポート・モレスビー市におけるチンブー族テリトリーの延長として存在しているのである。

このように、流入民はポート・モレスビー市に住みながらも、出身部族に帰属意識を持ち、出身部族に囲まれた環境で生活する石器的部族民であり続けるのである。すなわち、スクウォッター・セトルメントは近代都市ポート・モレスビーの中の部族の飛び地なのである。そこは都市の中に存在しながらも、その生活様式、思考様式は都市のものではなく、部族のものなのである。パプアニューギニアには700~800の部族があると言われる。そのすべてがモレスビー市に飛び地を持っているというわけではないにせよ、少なくとも数十のオーダーの部族が飛び地を持っていると考えられている（1970年にはすでに40のセトルメントに1万2000人が住んでいた〈Oram [1976a] p.152〉。その後のモレスビー市の人口増加〈約3倍〉を考えるとセトルメントの数とそこでの移住者は2000年現在、一層膨れ上がっていると考えられる）。すなわち、ポート・モレスビー市はキャンベラ流の現代的計画都市の枠組みの中に無数の石器的部族の飛び地を抱え込んだ真に奇妙なる都市なのである。

このように、短期間、僅々30年の間に都市という人口集合体が成立してしまったポート・モレスビーをはじめとするパプアニューギニアの都市は、他の地域では数百年、数千年をかけてゆっくりと形成されてきた都市の成長過

程を凝縮して我々の前に提示してくれていると言える。そして、その過程を子細にながめることにより、都市を都市たらしめているいわば本質が露呈しているのではないかと考えられるのだ。

本章では、1950年代半ばにオーストラリアによる統治によって、それまでの石器時代から近代世界へと引きずり出されたニューギニア高地のインボング族が、ポート・モレスビーを中心とする都市にどのように進出してゆき、その中でニッチを獲得し拡大してきたかを論じてゆき、それを通じて都市を都市たらしめている原動力を探ろうとする試みである。

第1節 ニューギニア高地への白人の到来

標高1500メートルを超えるニューギニア高地に文明が将来されるのは20世紀も30年代に入ってからである。オーストラリアの国際連盟委任統治下のニューギニアは当時、ブルロ（Bulolo）金脈が発見され、ゴールドラッシュの只中であつた。大手の金脈採掘会社のニューギニア・ゴールドフィールズ（New Guinea Goldfields）社はさらなる宝の山を求めて、2人のオーストラリア人金鉱夫マイケル・レイ（Michael Leahy）とマイケル・ドゥワイヤ（Michael Dwyer）を、これまで外部世界からは隔絶された未踏の地であつたニューギニア中央高地に送り込んだ（Ashton [1978] pp.174-175）。それまで外部からの人間を寄せ付けなかつた峻険な山壁を乗り越えた2人がニューギニア高地に見出したものは、無人の山岳地帯ではなく稠密な人口を擁する農耕社会であつた。

その後マイケル・レイはその末弟ダニエル・レイ、そして統治府の巡回統治官（パトロール・オフィサー）ジェームズ・テラー（James Tayler）とともに1933年、ニューギニア・ゴールドフィールズ社の資金提供の下にニューギニア中央高地の東から西へと300キロメートルを超える山岳地帯を踏破し、東西60キロメートルに及ぶ広大なワギ河谷盆地を発見し、終点をマウント・

ハーゲンと名付け、ここを簡易滑走路とベースキャンプとした (Mennis [1982] p.40)。レイ兄弟は飛行機による物資補給を受けながらマウント・ハーゲンを中心に金脈探査行を繰り返し、ついにクタと呼ばれる地域に流れる川に砂金を発見する。この時のレイ兄弟の金脈探査行の一つは、カウゲル河を越えインボング族の地を横切っている。これがインボング族の白人接触史の濫觴であった。だが、レイ兄弟は砂金が出るクタにとどまり、マウント・ハーゲンには統治府のパトロール・ポスト (巡回駐屯所) とカトリックとルター派のミッション・ステーションが開設され、白人の活動はマウント・ハーゲンの周りに局限され、カウゲル河の南のインボングの地までその影響は及ばない。

カウゲル河の北のメアミ族の地には統治官が入って部族間戦争は停止され、人口統計調査も行われたが、急流V字谷カウゲル河とインボング族の絶えざる部族抗争は白人のカウゲル南下を拒んだ。

加えて、1942年に始まる太平洋戦争ニューギニア戦線の死闘はオーストラリア統治府からニューギニア高地平定の余力を奪い、白人民間人も本国引き揚げを要請された。

こうして、オーストラリア統治府の統治の拡大は停止し、宣教団の教線も足踏みしたまま終戦を迎える。

1945年には再び統治の試みが再開し、メアミ族の地では再び人口統計調査が行われたが、白人権力は戦前の統治領域の復旧を行うのが精一杯でカウゲル河の南にまで統治の手を伸ばす余裕を持たなかった。

そうした時、あるアメリカの雑誌にニューギニア高地を紹介する記事が載った。それをハイチで布教に従事していたG・T・バスティン (Bustin) という男が偶々目にした。バスティンは靈感に打たれ、キリストの恩恵に浴していない不幸な未開人にイエスの教えを与え、その魂を救うのが己の使命だと思いこんだ。

1948年、バスティンは早速、渡航の資金を募り、オーストラリアに飛んでニューギニア渡航許可を得るとニューギニア高地の統治本部を訪ね布教許可

を申請した。その時、ニューギニア高地の統治本部の長をしていたのがレイ兄弟とともに1933年、歴史的なニューギニア高地横断を行っていたジェームズ・テラーだった。テラーはカウゲル河一帯の布教をバスティンに勧め、バスティンは早速マウント・ハーゲンに飛び、テラーの指示を受けたハーゲン・パトロール・ポスト（巡回駐屯所）の巡回統治官がバスティンをメアミの地へとエスコートした。バスティンは布教先をカウゲル河およびその支流ネピリア河一帯と定め、一旦アメリカに帰国したが、翌1949年、再びニューギニア高地を訪ねるとメアミ族の地パバラブルに布教駐在所を開設した。更に1950年、カウゲル河を渡って、インボングの地にも布教駐在所の開設を図るが、当時、アンブル村一帯で吹き荒れていた部族戦争に遇って撤退を余儀なくされた⁽¹⁾。

バスティンら東西インド・バイブル・ミッションがメアミの地で布教に精力を傾けていた頃、ニューギニア高地東部では重大な歴史的過程が進行しつつあった。それは、ニューギニア高地統治本部長のジェームズ・テラーが下した決断、すなわちニューギニア高地への貨幣経済の導入であった。それまでは、白人達が現地人を雇ったり作物を買い入れる際には、ニューギニア高地で流通していた伝統的貝貨（shell valuable）をもって支払いをしていたのである。これらの貝貨は海岸地域で採れた貝殻に加工を施したものを村から村へ交易ルートを伝って高地にまでもたらされたもので、マウント・ハーゲン地方では貝貨1枚が豚1頭に匹敵し、伝統的交換儀礼や婚資に豚とともに用いられたものである。白人達は海岸地域でこれらの貝殻をただ同然で手に入れ、加工を施して飛行機で大量に高地に運び込み、豚やサツマイモ、野菜を大量に手に入れ、現地民の労働を豊富に利用していたのである。一方、白人と接触し、貝貨を手にした現地民達もたちまちにして貝殻長者となった。「何千というこれらの貝は白人の占領下の10年間にこの地方一帯に散らばっていった。結果、ハーゲン（Hagen）地方の原住民は百万長者となった。男たちは貝を手周辺地域におもむき、徐々にため込んでおいた貝で妻を手に入れた。かつては、長は3人も妻がいれば大したものだったが、今では8

人でも10人でも買うことができる。かつては何の地位も持っていなかった若い男たちが今では白人のために働いて貝の支払いを受けることによって地位を向上させることができるようになった。今日では、各部族ごとに何百というゴールド・リップ貝 (gold lip shell, *Pinctada margaritifera* Lightfoot, アコヤガイ属, クロチョウガイ——引用者) がある」(Gitlow [1947] p.8)。

テラーはこうした貝貨の支払いからオーストラリア貨幣の支払いへと政策を転換させたのだった。

だが当初は高地人にはこうした新来の貨幣の内に何らの価値をも見出すことができなかった。

1947年末から1948年初めにかけて、テラーは2880オーストラリア・ドル(以下Aドル)を支払った。しかし、これらの貨幣は退蔵されて現地の経済体系の中に入ってはゆかなかった。これら退蔵貨幣が放出されたのは、マイケルとダンのレイ兄弟の次兄ジム・レイが1948年6月に統治本部近くに店を開き(ニューギニア高地で最初の店である)、飛行機に積んできた貝貨や鉄製品を並べた時である。

政府から支払われた貨幣を退蔵していた現地民は争って、ジム・レイの店に押しかけ、ただの木の葉や石ころの類に過ぎないと彼らが思っていた貨幣を「価値のある」貝貨や鉄製品に換えた。ジム・レイは5日で品物を売りつくし、1016Aドルが手元に残った。彼はすぐ次の便をチャーターし、今度はたった1日で1024Aドル相当の品物をすべて売りつくした。つまり、テラーの放出した2880Aドルは現地民の手元で退蔵され、ジム・レイが店という形ではけ口を作ってやるとそっくりそのままジム・レイの懐に転がりこんだのである(Finney [1973] p.41)。つまり、テラーの支払った貨幣はニューギニア高地人には一種の手形と見なされ、ジム・レイの店で彼らにとって実際の価値があると見なされる貝貨や鉄製品という形で落とされるまで意味を持たなかったのである。

貨幣が白人と接触したニューギニア高地人にそれ自体で価値あるものと見なされ、経済体系に組み込まれるまでには10年の年月を要した。マウント・

ハーゲンのような白人との接触の歴史の長い地域においてすら、貨幣が受け入れられたのはようやく1959年に入ってからのことである (Mennis [1982] p.135)。

貨幣が受け入れられるようになった契機は二つある。一つは高地労働計画 (Highlands Labour Scheme。以下 HLS) と呼ばれ、高地の若者達を海岸地域のプランテーションで働かせる契約労働制度、もう一つは高地における換金作物であるコーヒー栽培の開始である。HLS によって海岸地域のプランテーションや町といった近代的空間で1年半を過ごした若者達は貨幣経済に関する知識を身に付けて村に戻った。また、コーヒー栽培に適した風土を持つニューギニア高地で白人達が始めたコーヒー・プランテーション (これもジム・レイが先頭を切った) は、ニューギニア高地人に懐疑と好奇の念を起こした。ジム・レイの成功に続いて次々と白人達が自分達から土地を買ってはコーヒーの木を植えていくのを見た現地民達は、白人の驚異的な富の謎と源がそこにあるのではないかと考えた。収穫されたコーヒーの実は貨幣と交換された。そうであるからには貨幣は白人達の巨富を支えるものであることは確かだった。

こうしてニューギニア高地人の観念にはコーヒー栽培と貨幣経済が一体のものとして浸透していった。ゴロカ地域では現地人向けのコーヒー植え付け指導が始まって10年後の1962年には200万本のコーヒーの木が植えられていた。そして、1963年から1965年までの3年間に、コーヒーの植え付けは毎年50万本ずつ増えてゆき、1965年6月にはゴロカ地域の住民が持つコーヒーの総本数は343万8000本に達した (Finney [1973] p.67)。

こうしたコーヒー・ブームは貨幣経済をニューギニア高地のいたる所に浸透させ、それはビジネス (*bisnis*: ビジネスのピジン語化したもの) という新しい経済活動のカテゴリーを生起させた。貨幣経済の入った所では誰もがビジネスに参入しようと躍起になった。誰もが他の者に遅れまいと懸命になった。こうして、1950年に8000USドルであったコーヒー輸出総額は、1955年には20倍近い15万 US ドルに、1960年にはそれをさらに9倍した143万4000

USドルに増え、その間の平均成長率は年平均80%にも及んだ。その後もこの勢いは衰えることなく、毎年20~60%ずつ成長してゆき、1970年にはついに2018万2000USドルに達した。その頃には現地人コーヒー生産が全産出額の78%に達していたから、ニューギニア高地にはコーヒーだけで1600万USドルもの貨幣が流入してきたわけである。ジェームズ・テラーが貨幣をニューギニア高地に導入してわずか22年の間にニューギニア高地の貨幣経済(購買力)はコーヒーだけで数千倍に達したのである。それは空前絶後の経済成長であった。

第2節 インボング族における石器時代の終焉と「近代化」

ニューギニア高地の先進地域にこうして貨幣経済の火がつき始めた1953年、インボングの地に本格的に白人が入ってきた。統治府はイアリブの地にイアリブ駐在所(パトロール・ポスト)を置き、絶え間なく繰り広げられていた部族戦争の鎮定に乗り出した。白人の銃の力はインボングの弓矢の力を圧倒し、1955年にはあれほど熾烈であった部族戦争はことごとく鎮圧され、インボング全域にパックス・オーストラリアーナ(オーストラリアの平和)がもたらされることとなった。

その2年後、ダニエル・レイがメアミの地にコーヒー・プランテーションを開き、この噂がカウゲル河を越えてインボングの地にも伝わっていった。

一方、インボングの地に平和が訪れることを待ちに待っていた宣教団がミッション・ステーション(宣教駐在所)を開きに、インボングの地にやってきた。イアリブの統治府駐在所のそばにはカトリックのカプチン派宣教団がミッション・ステーションを開き、カウゲル河を越えて少し入ったカウペナの地にはG・T・バスティンのバイブル・ミッションが入った。両教団とも早速、小学校を開設し、まず子供達の魂を己がものとするところから着手した。そして、その頃(1959年)には早くもインボングの地に貨幣の流通が始まる。

そして、1960年には HLS が始まり、若者達が大量、海岸地域のプランテーションへと飛んでいった (Kelly [1960] p.7)。

こうして、1960年前後には、遅れて近代世界に編入されたインボング族の間にも、国家権力、キリスト教、貨幣経済というニューギニア高地近代化の三点セットが導入されたのである。

その後の事態の展開は過熱をさわめた。

1960年にはすでにコーヒー栽培熱がインボングの地を席卷した。だが、統治府はコーヒー植え付け指導を行わず除虫菊の生産を勧めたため、インボング族は失望し、コーヒー栽培熱は去った。

2年後、今度はビジネス熱がインボングの村々に広まった。カウゲル河の北ではすでにダニエル・レイによって火をつけられたビジネスへの熱狂が渦巻いていた。それがカウゲル河を越えてインボングの地にも伝染したのである。だが、実のところ、コーヒーの木を持たないインボング族にとってビジネスといってもその実体を欠いたものであった。ただ、ダン・レイがビジネスというものを行って巨大な富を築いているという風評がインボング族の間にビジネスへの熱狂をおおったのだった。

さらに2年後、1964年には第1回総選挙が行われ、村々にも地域政府評議会という地方組織が数村ごとに結成された。石器時代から脱して10年も経っていなかったインボング族には議会制民主主義も投票行為もいかなる意味を持つかわからなかったが、白人統治官に言われた通り議員を選び、地域政府評議員を選んだ。

独立へ向けてのオーストラリア統治本部の政策は加速していった。

翌年、バイブル・ミッションが4軒の売店を開いた。インボングの地で初めての店がここに現れたのである。店では鉄斧、ナイフ、米、かんづめといった商品が売られた。換金作物を持たないにもかかわらず、商品は順調に売れていった (Sisley [1966] p.7)。

バイブル・ミッションの商店開店は、インボング族の間に商店開店熱を生んだ。今度こそ白人の持つ富への道が開かれたと思こんだインボング族は、

親族一同、金を出し合い、バイブル・ミッションの売店から買い入れた商品を茅ぶき屋根の小屋に並べた。1966年にはインボン族保有の商店は3軒から12軒へと4倍に増えた。収益は皆無に等しかったが、白人の富へ至る道を自らも歩もうと切望するインボン族の商店は翌1967年には25軒へと倍増した。

また、このころ、学校教育熱が急激に高まった。村人達は子供達を既存の小学校に競って入れ、小学校を近くに持たない村々は統治府に小学校を作ってくれと陳情した。ここにも白人の生活へ至る道を我がものにしようとするインボン族の熱望があった。実際、学校を出て成功の道を歩みつつある若者が生まれていた。

グライミー・ワレナという名の22歳のその青年はバイブル・チャーチが開いた小学校の第1期生で、その聡明とキリスト教への従順を白人宣教師達から愛でられ、小学校を卒業するとキリスト教指導者養成学校 (CLTC) に送りこまれ、牧師とすべく訓練を与えられた。グライミー・ワレナはCLTCを卒業するとカウペナ・ミッション・ステーションに戻ってインボン族最初の牧師兼ミッションのマネージャーとなるかたわら、白人宣教師達の助けを受けてカウペナにコーヒー園を拓くとともに、トヨタ車を買入れ運送業を始め、出身村のモカ村に商店を開いた。白人宣教師達は資金を与えるとともにビジネスのノウハウも授け、1969年にはグライミーをインボン族の地で最も抜きん出たビジネスマンと評判を取るまでに至らせた (Paypool [1976] p.287)。

そして海岸地域のニューギニア第二の都市ラエとニューギニア高地を結ぶハイランズ・ハイウェイがカウゲル河に到達し、架橋が始まるや、すかさずグライミー・ワレナは従来のハイウェイ・コース沿いに土地をリースし、ガソリンスタンドを建てた。

バイブル・ミッションはバイブル・ミッションで、カウペナ・ミッション・ステーションに隣り合ったイミ村に製材所をスタートさせた。

バイブル・ミッションとグライミー・ワレナの成功を羨望しつつ、インボ

ング族のビジネス熱は続き、1971年にはインボングの地には215軒の商店が群立していた。人口僅か1万5000の、換金作物を持たないインボング族にはあまりにも過大な店数である。パイブル・ミッションやグライミー・ワレナの店を除く他の商店は、事実上、開店休業状態にあった。にもかかわらず、インボング族のビジネスに対する信仰にも似た希求は鎮まることがなかった。

こうした熱意は1970年代になるとようやく実を結び始める。海拔1800メートル以下の地域ではいたる所にコーヒー園が拓かれ始め、優秀な子弟は中学校へ進学し始めていた。

独立を目前に控えてようやくインボング族にも近代セクターへの道が開け始めたのだった。

第3節 インボング族エリートの誕生

1972年総選挙で独立を謳う国民連合政権が成立すると、1975年の独立が決定され、それに向けて国家機構の設立が始まり、それまで白人が占めていた行政機構の要職は、教育を受け、英語が自由に操れる若いPNG人エリートがとって代わるようになっていった。すでにパプアニューギニア大学(UPNG)が1967年に開校し、第1期生が1971年には卒業していた。また、PNG第二の都市ラエに設置されていたラエ工科学校は工科大学に昇格し、ニューギニア高地の東のセンター、ゴロカには教員養成大学が設立された。これらの大学の初期の卒業生は即座に中央省庁の課長クラスに抜擢され、独立とともにあつという間に国家機構の要職に就いた。

カウペナのパイブル・チャーチの小学校の第1期生で、ゴロカの教員養成学校を出たウィワ・コロウィもそのような初期の教育エリートの一人だった。彼は教職に進まず、外務省に採用され、独立と同時にEC(ヨーロッパ共同体)へ大使として派遣された。しかし、彼の野心は官僚ではなく政治家にあった。1976年、独立後最初の総選挙に立候補するため、彼は大使の職を辞し、

PNGに帰国すると、インボン族を含む南高地の州選挙区で活発な選挙活動を始めた (Ballard [1983] pp.185-186)⁽²⁾。

一方、同窓のグライミー・ワレナはインボン小選挙区に2度目のチャレンジをしようとしていた。グライミーはすでに30歳となり、インボン族の地では押しも押されぬ実力者となっていた。

1977年の第1回総選挙では州選挙区からウィワが、インボン小選挙区からはグライミーが当選し、ウィワは即座に厚生大臣に登用された。石器時代に生を享け、わずか30年で近代国家パプアニューギニアの大臣にまで登りつめたのである。それは、第二次世界大戦後のパプアニューギニア独立へと向かう強烈な上昇気流のなせる業であった。もちろん、ウィワ自身の政治的手腕も端倪すべからざるものがあった。彼は立て続けに地元利益をもたらした。一つはエアリブ郡庁所在地に病院を建てたことであり、いま一つはカウゲル河の支流、パウエンダ川に水力発電所を建設したことである⁽³⁾。

一方、グライミー・ワレナは政治家としては生彩を欠き、陣笠にとどまった。しかし、ビジネスへの才覚には長じていた。彼はバイブル・ミッションとともにニュージーランドの製材会社ビーチウッド社を誘致し、議員としてのコネクションを使ってPNG第二の高峰ギルウェ山山麓の山林伐採許可権を取得し、バイブル・ミッションとともにイミ村とアンブル村の両村にまたがる広大な敷地を持つビーチウッド製材所の株主となり、製材所の従業員の生活物資を供給する商店を建てた。こうして、グライミー・ワレナはインボン族随一のビジネスマンとしての地位を不動のものとしていった⁽⁴⁾。

皮肉なことに政治的手腕を発揮したウィワは1982年の第2回総選挙で落選し、冴えない陣笠代議士であったグライミーは、高等教育を受けた、彼よりも若い世代のチャレンジを斥けて連続当選を果たす。1986年にはようやく大臣の地位も得て、彼の政治的地位は盤石のものと思えた。だが彼の最大の経営的基盤であったビーチウッド製材所がつまずきの石となった。1987年1月、ビーチウッド製材所の敷地の返還ないしは賠償を求めて、アンブル村の村民達が製材所へ押しかけた。白人マネージャーは州庁所在地メンディから警

察を呼び、この要求を撥ねつけた。村の代弁者となったパプアニューギニア大学生サイモン・アペはグライミー・ワレナのもとに赴き、村人の要求を支持するよう訴えた。ところが、グライミー・ワレナはサイモン・アペの嘆願を斥けたのみならず、サイモン・アペを「この猿野郎めが何を言うか」と辱めた。怒ったサイモンは「猿に何ができるかお見せしよう」と捨て科白を吐いてその場を後にした。ここに、グライミー・ワレナの没落が始まったのである⁽⁵⁾。

第4節 サイモン・アペの興亡

サイモン・アペは1959年にギルウェ山麓の村、ゴゴブゲに生まれた。サイモンの父、アペ・コデューロは1954年、統治府がインボングの地に入ってくるといち早く帰順し、統治府から村落警官に任命され、巡回統治官についてその統治行為（戦争鎮圧、人口統計、裁判、道路工事など）の手助けをして回っていた。そのため、サイモンはイアリブ・ステーション付近の母方祖母に預けられ、祖母の膝下で育った。やがて、サイモンはカブチン派が開いた小学校に入り、優秀な成績を取って卒業した。そして、歩いて（当時は車道がなかった）5日の距離にあるタリ中学に入学した。1972年のことである。この頃はすでにPNG人教育エリートの第1期生は大学を卒業し、政府の高官候補生としての道を歩いている。サイモンはタリ中学もきわめて優秀な成績で卒業し、生まれて初めて飛行機に乗って海岸地域の町マダンの国立高等学校へ入学する。国立高等学校は国全体で四つしかない超エリート校である。その間に父親のアペは弟の家族を呪詛したことをとがめられ、出身村のゴゴブゲを追われるように去り、カウゲル川の対岸、カンビアの地に住む己が氏族のもとへ向かう途中、アンブプル村の有力者タンビに説得され、土地を与えられアンブプルに落ち着くこととなる。1974年のことである。以後、サイモンは休暇の度ごとにアンブプルに戻りタンビの薫陶を受け、インボング族

の指導者たるための帝王学を学んでゆくことになる。タンビは小・中学校しか出ていない己が息子に代わって、アンブルの未来の指導者としてサイモン・アペに期待をかけたのである。

1978年、サイモンはマダンの国立高等学校も優秀な学校で卒業し、大学進学資格を獲得するが、生活費を稼ぐため、隣の西高地州政府に衛生官として就職する。その頃には、国や地方の政府の要職は先行する世代のエリートにより占められており、15歳年長のウィワ・コロウィは大臣となっている。1980年、サイモンは同じアンブル村のクク・ウィンディと結婚する。ククはその当時、女子としては珍しい中学卒業生であり、この結婚はサイモンの父アペとククの母ゴパの強力な勧めによりククの父ウィンディの反対を押し切って実現されたものである。ククの母ゴパはタンビの前にアンブル村の指導者であったトゥエポの娘である。トゥエポ、タンビと続けてカリリポイ部族一の有力者を出してきたアンブル村が次代の指導者をも自村から出し、影響力を保持するための基盤固めであった。ただ、サイモンの父アペは婚資として3頭の豚と金300キナしか出さなかった。中等教育を受けていたククの婚資は豚30頭と金3000キナが正当な値であった。このことはアペ家とウィンディ家の間にしこりを残すことになる。

とまれ、サイモンとククは結婚し、2人はマウント・ハーゲンに住み、男子を2人もうけることになる。

だが、サイモン・アペは家族の安全を守るための銃を買うことを州政府に申請するが却下され、何度も強盗に襲撃され怒りが積もっていたサイモンは辞表を出し、アンブルへ戻ると大学進学手続きをして、1985年パプアニューギニア大学に入学した⁽⁶⁾。

サイモンは大学の家族寮にはいるが、浮気をし、咎めたククの背中をどやしつけ、ククは背中を痛める。サイモンはククと2人の息子をアンブル村に送り返し、一人、ポート・モレスビーにとどまった。ここに、サイモン・アペとウィンディ家の間に隙間風が入ることとなる⁽⁷⁾。

そして、1987年、アンブル村はビーチウッド製材所に用地返還を求め、

村の指導者タンビはサイモンを村に呼び戻し、村人達は頭が切れて英語が堪能なサイモンを先頭に立てて製材所のオフィスに押しかけ、所長と直談判に及んだ⁽⁸⁾。

そして、サイモン・アペに運命の分岐点をもたらすグライミー・ワレナへの陳情が行われた。

その場で「この猿めが」と辱められたサイモンは報復を誓い、タリ中学の時代に知り合っていたアンソニー・テモのもとを訪れる。アンソニー・テモはサイモンより10歳ほど年長で、中学を卒業した後、南高地州政府に就職し、そのかたわらトラックを所有し、一族を運送業に従事させていた (Ballard [1983] p.186)。1974年、テモは州庁所在地メンディの町にある自克蘭の土地の賠償請求運動を起こし、州政府から疎まれ、サイモンが中学に在学していたタリのステーションに転勤となり、2人はそこで知己となっていたのである。その後、テモは州政府を辞し、ビジネスに集中し、富を築いていた。テモはインボン族ではなく、隣接のメンディ族であったが、その村はインボン小選挙区に含まれていた。サイモンはテモに、来る6月の総選挙への立候補を勧め、自ら選挙後援会長となってインボン族の票のとりまとめを行うことを約束した。そして、カリリポイ部族随一の実力者タンビとその副官格であるウィンディ老人に村々の指導者達を説き伏せさせ、更にテモの選挙資金を使って大々的なキャンペーンを行い、フェスティバルを催し、近隣一円から人を集めて、屠ったブタ肉、乾パン、コーラなどを気前良く分ち与えていった。このときのキャンペーン隊はサイモンの弟達、タンビの息子達、ウィンディの息子達などアンブル村の若い衆から成り、これが後のサイモンのビジネス活動の主力部隊となる⁽⁹⁾。

第3回国會議員選挙は、こうしてグライミー・ワレナとアンソニー・テモの接戦になったが、サイモンの選挙キャンペーンとタンビの名声と影響力が功を奏し、テモが僅差でグライミー・ワレナを押さえた。

アンブル村は二つに分かれ、怒ったグライミー支持派がサイモンとウィンディー家を斧と弓矢で襲い、サイモンらは村の墓地に逃げ込み、銃を構え

て寝ずの番を張った。翌朝、テモのトラックがサイモンを拾い、マウント・ハーゲンの空港まで送りに来ると、グライミー支持派もトラックを調達し、サイモンを追って2台のトラックはカーチェイスを繰り広げた。

だが結局、サイモンは無事ポート・モレスビーまで逃れ、大学に復学したが、当選したアンソニー・テモが運輸大臣に任命されると大学を辞し、大臣秘書官となり、白人実業家の経営するディスコの上手のアパートに入った。そして、村の小学校を卒業して中学に進学できなかった若い衆をポート・モレスビーに呼び寄せ、技術習得のため、マカナ職業学校に入れ、村のクリガイ氏族の若い娘をタイピスト・スクールにやりながら同棲を始めた⁽¹⁰⁾。

一方、運輸大臣アンソニー・テモを通じてインボングの地を通るハイランズ・ハイウェイの舗装工事をスタートさせ、更に、これまで自動車道がついていなかったギルウェ山麓の村々へハイウェイの支道を通じさせるリペノム・ロード・ワークを始めた。いずれも、地元への利益還元を行い、テモへの支持を確保・拡大することを狙ったもので、とりわけリペノム・ロード・ワークはアンブル村一帯のグライミー支持派の懐柔を狙ったものである⁽¹¹⁾。

その間に妻のククはポート・モレスビーに降りてきて、サイモンのもとに身を寄せた。それを見てサイモンの愛人のクリガイ氏族の娘はサイモンのもとを去り、ショックを受けたサイモンは悔い改め、ククに伴われ、ペンテコステ派の教会に入信する。

一方、アンブル村ではタンビの次男テネがピアホールの認可を受けて開店すると、リペノム・ロード・ワークで土地の賠償金を手にした男たちや道路工事で現金収入が入った男たちが押し寄せ、テネは一気に近隣随一のビジネスマンとなった⁽¹²⁾。

他方、サイモンも1990年、アンソニー・テモやアパートの家主であった白人実業家のコネクションを利用して、オーストラリア人古着商と渡りをつけ、ポート・モレスビーのバディリ地区の倉庫を改造して巨大な古着屋を開店した⁽¹³⁾。

それまでポート・モレスビー市民はチャイニーズ・ストアで中国製の安

物衣料を購入していたが、サイモンの古着屋は古着ながら上質のオーストラリア製品で、しかもチャイニーズ・ストアの衣服よりも安価で販売したのでたちまち客はチャイニーズ・ストアを捨て、サイモンの店に衣服を求めて集まるようになった。

15万ポート・モレスビー市民の潜在的需要を掘り当てたサイモンの古着屋は榮えに榮えた。翌1991年にはサイモンはポート・モレスビー市のゲレフ地区に新たに古着屋を2店舗開いた。そして一つは自らの弟ケベンベ、一つは妻ククの弟アイエをマネージャーに任命した。そして更に、PNG 第二の都市ラエと、島嶼部のセンターであるラバウルにも出店する計画を立てた。

そうしたサイモンの急激な経済的成功を妬んだ敵グループからのものと思われる、白人1人、パプア人2人からなる暗殺グループに、ある朝狙撃されたサイモンは、数丁のライフルを買い入れ、店舗の防備を固めるとともにピストルを携行し、これにもピストルを携行させたタンビの三男リンビエをボディガードとして常に連れ歩き、寝所も、ある日はホテルに、ある日は3店舗の一つにといった風に、常に居場所を突き止められないよう気を配った⁽¹⁴⁾。

そうしているうちに第4回総選挙が行われる1992年となった。サイモンは各店舗に最小限の人員を配置すると、店員の半数を引き連れてアンブル村に帰った。

こうして、サイモンの古着屋の店員達は選挙の集票マシーンとなり、アンソニー・テモのために再び活発な選挙運動を展開した。地元で公共事業を誘致し、利益を、前対立していたグループにも広く提供していたテモ・サイモン組は、今回の選挙では他を寄せつけぬ圧倒的な大差で当選した。だが、テモ・サイモン組にとっては、この時が絶頂となった。テモ自身は大差で当選したものの、政権は彼の所属する党には渡らず、テモは野党に回ってしまった。これによって地元への利益誘導の道が絶たれてしまった。一方、サイモンは再び浮気の虫がうずき、投票前夜に村のクリガイ氏族の娘と懇ろになってしまった。サイモンは選挙後、間髪を入れずに娘と結婚し、クリガイ氏

族に1万キナと20頭のブタを婚資として与えた。これに怒ったのが第一夫人のククである。自分の時の婚資は3頭のブタと僅か300キナであったのに、よりもよって敵対クランの娘には20頭のブタと1万キナの金を与えるとは何事か。怒りと嫉妬に逆上したククは弟のアイエに2万5000キナを銀行のサイモンの口座から引き出させ、アイエはその金を父の母方親族で幼いときからの親友ジョセフ・ブルノの口座に振り込んだ。

事を知ったサイモンは激怒するとピストルを空に向けて放ち、ククをはじめとするウィンディ兄弟を店から追い出した⁽¹⁵⁾。

放逐されたウィンディ兄弟はポート・モレスビーの路上をさまよひ、夜は路上に寝るといふ暮らしに陥った。それを見かねたエレペ・コロウィ（ウィフ・コロウィの離婚した第一夫人）は、ウィンディ兄弟に自分の空き屋（電気は引いてない）を与え、ウィンディ兄弟はようやく借りの宿ながら安堵の道を見出した。その後、ククはサイモンのもとに戻り、サイモンは一旦ククを殺そうと考えるがククに産ませた子供達の事を考えて思いとどまった⁽¹⁶⁾。

こうして、サイモン・アペとその姻族ウィンディ家の間には修復不可能な分裂が生じた。

これはサイモンにとっても痛手だった。ククの弟アイエは商才に長け、実質上、サイモンの古着チェーンのマネージャーの役割を果たしていたからである。

この年、サイモンにはもう一つ、頭痛の種が生じた。それはアンプル村のタンビー家のトラブルである。

サイモンは、バスとランドクルーザーを買い、タンビーの息子カリにバス・ビジネスをさせ、ランドクルーザーの鍵は父の出身村ゴゴブゲのオボガイ氏族の男フランシス・ポラに預けていたが、カリはバスの収益を第二夫人の婚資にするため着服、またバスの車掌をしていた従弟のナーカノリも1200キナを懐に入れるなど、サイモンの目の届かないところで勝手放題をした後、無免許でランドクルーザーを運転して横転し大破させ、その後、飲酒運転を行って衝突事故を起こし、同乗させていた乗客多数を負傷させ、賠償を要求さ

れた。知らせを受けたサイモンは村に飛んで帰り、真相を知るとカリからバスとランドクルーザーの鍵を取り上げ、銃を放って従弟のナーカノリを追い払うと、アンブブルの村の広場でランドクルーザーの車輪をはずしてタイヤを焼き、怒りの示威行動を行った。そしてカリの事故の負傷者に賠償金を与えてポート・モレスビーに帰った。その直後、タンビが自クランのトゥリの妻と十数年にわたって密通をしていたことが発覚。800キナとブタ4頭の賠償を請求されるが払えず、サイモンに助けを求めてポート・モレスビーに飛んだ。怒りの収まらないサイモンは援助を与えることを断り、帰りの飛行機代を出すことも拒んだ。そこで、サイモンの弟キンジャロなど村の若い衆3人が金を出し合い、タンビにエア・チケットを買ってやり、ようやくタンビは村に帰るを得た⁽¹⁷⁾。

こうして、サイモンは頼みとする両腕であるウィンディー一家とタンビ一家と断絶し、首都のビジネス上でも、村の社会的立場においても孤立の影を深めてゆくのである。

そして翌1993年、サイモン・アペの凋落が始まる。サイモンの古着屋の大成功を見て、独自のルートで古着を買い入れ、野外マーケットで古着を売る者達が現れたのである。彼らは店舗を持たない分、サイモンの売る古着より価格の安い古着を売ることができる。パディリ本店の収益は1日700～1000キナ（1キナ125円相当）から200～300キナに落ちた。サイモン・アペは独占状態から一転、厳しい競争にさらされることとなったのである。

この内憂外患に際して、サイモン・アペは焦燥をまぎらわせるために酒に手を出すようになった。すでにクリガイ氏族の娘を第二夫人にしたときから、サイモンは信仰を捨て、第三夫人、第四夫人と若い妻をめとり、そのたびに婚資に大金を散じていった。

サイモンが押し寄せる劣勢を前にして有効な手を打たず、酒色や賭け事に逃避している間に事態は悪化の一途をたどっていった。

1994年にはラバウル支店を閉鎖せざるを得なくなり、翌1995年にはラエ支店閉店、1996年にはゲレフ支店（2店舗）閉店と事業はどんどん縮小し、残

るはバディリ本店のみとなった。店員として働いていたアンブル村の若い衆も次々と店を辞め、村へと帰っていった⁽¹⁸⁾。

一方、アンブル村では父のアペ老人が村の指導者タンビとともに村の広場に面した家に暮らしていたが、1996年、2人が同時に病に倒れ、サイモンはタンビをポート・モレスビー総合病院に入院させ、自分の父親はイアブリの病院へと運んだが、期せずして2人は同日同時刻に亡くなった。これは呪殺であると言われている。サイモンは2人の葬儀に4万キナと120頭のブタを屠って捧げ、哀悼の意を表した。こうしてサイモンは実の父と父同様に支援してくれたタンビという2人の支援を失ったのだった⁽¹⁹⁾。

窮地に瀕したサイモンはまだ資金に余裕のあるうちに、彼の最終目的である国会議員になるべく、1997年総選挙に打って出た。だが、サイモンが出馬したのは地元のインボング小選挙区ではなく、ポート・モレスビー北東選挙区だった。それは一つにはインボング小選挙区から出馬するアンソニー・テモに遠慮したこと、いま一つにはタンビが死んでしまった今となっては、アンブルへの転入者であるサイモンにはしっかりとした後ろ盾がなくなったことが原因であった。

サイモンは最後の賭けに、手元に残った60万キナ（7500万円）を投じた。そして、村から18人の若い衆をポート・モレスビーに呼び寄せ、バディリ本店の6人と合わせて24名のキャンペーン・チームを作り、トラック4台を総動員して果敢に選挙戦を戦った。だが元々、ポート・モレスビーの地では他所者であるサイモンには地盤が欠けていたし、知名度も元パプアニューギニア銀行総裁でナイトの称号を持つメケレ・モロータ（総選挙後首相となる）の前には遠く及ばなかった。華々しい選挙キャンペーンも空しく、サイモンは4位に終わった⁽²⁰⁾。

これが致命傷となり、サイモンの古着ビジネスはますます転落の度を深めていった。

そして1999年6月にはバディリ本店もついに閉店のやむなきに至り、サイモンは銀行から借りた巨額の債務を抱え、利子の支払いすら滞るようになって

た。サイモンは閉鎖したバディリ本店を二分し、華人事業家とインボン族事業家にそれぞれ月2500キナで賃貸することにより、辛うじて破産を免れた。サイモンにとって今後の希望の糸は、彼の氏族オポガイ・クランの住むウエスト・カンビアの地に金・銅・ダイヤモンドの大鉱床が発見されたことで、高学歴者を持たぬウエスト・カンビアの地元住民に交渉団体の議長となるよう要請されていることである。ただ、オポガイ氏族は双方に7人ずつの死者を出したウエスト・カンビア対パバラブルの間の部族戦争に巻き込まれており、鉱山会社はいつ採掘に着手するかは明らかではない。部族戦争終結まで凌ぎきれるか否かがサイモンの今後の命運を分かるところである⁽²¹⁾。

第5節 ウィンディ兄弟の勃興

一方、ウィンディ家の兄弟達は、サイモンの転落が始まった1993年にポート・モレスビーでビジネスを始めた。中心となるのは長兄でラエ・テクニカル・カレッジで經理士資格を取ったアイエである。

アイエはサイモンより8年遅れて1967年に生まれた。同年、アイエの父ウィンディ老人はやはり第二夫人に異母兄弟のエンバを生ませている。第一子、第二子がともに女子（第二子がサイモンの妻ククである）であることに落胆していたウィンディは、ようやく生まれた男子にアイエ（待ち望んだもの）という名を与えた。エンバはウィンディの尊敬する勇士の名から取った⁽²²⁾。

ところで、アイエとエンバが生まれたのはアンブル村ではない。アンブル村から20分ほど上手の村ポネモンゴである。ポネモンゴはウィンディの母の氏族〈ヌンプ・ヌンプ〉と〈イブグマイ〉を土地の主とする村である。ウィンディは母方の村に移住していたのである。それは、ポネモンゴの下手のカウペナにやってきたバイブル・ミッションの白人と接触を持つためであった。だがある日、ウィンディの留守中にウィンディの家は何者かの手で焼き払われてしまう。怒ったウィンディに、ウィンディの第一夫人ゴパ（クク、

アイエらの母)の父であるアンブル村の指導者で、カリリポイ部族全体にその武勇と知謀で影響力を持っていたトゥエポが、アンブルに保有する広大な土地を与えるからアンブルに戻ってくるように呼びかけた。かくてウィンディー家はアンブル村へ還帰することになる。ウィンディー自身は〈アベンダイ〉氏族に属し、父の代、内輪争いに敗れた父がその母の縁を頼って、生まれ故郷のキヨパガ村から〈ナウリガイ〉氏族の村、アンブルへ逃げてきたのである。それゆえ、ウィンディー自身はアンブル村では外様氏族の出ということになる。そこでウィンディーは白人とその学校に自分の一家の未来の展望を見出し、ポネモンゴ村に移住していたのである。ウィンディーの意図に沿って、子供達は皆カウベナの小学校に入り、長女のアゲレは看護学校を出て看護婦に、次女のククは当時のインボングの女子としては異例の中学校を卒業し、アイエはパパラブルのバイブル・ミッションの中学、エンバは公立のイアリブ中学を卒業し、エンバは成績優秀を以て、ポート・モレスビーの電電公社本社に推薦入社され、アイエも中学を二番の成績で卒業し、これはバイブル・ミッションの推挽によって地元のビーチウッド製材所に採用された。ウィンディーは精力旺盛であった。その後も第一夫人ゴパの腹からルジ、サニ、クゲコを、第二夫人モンボの腹からモスピー、エレン、ノンブリ、メレン、シドニーを産ませた。インボングの地では子供を多く持つことはそれ自体が力であり、繁栄の礎えであった。男の子は戦いの際には戦士となり、傑出した者が出れば家運の隆盛のためその周りに結束する。女の子は嫁に行くことにより多額の婚資をもたらし、更には姻族との盟友関係を作り上げる。ウィンディーは子供をすべて学校にやり、新たに白人のもたらした成功の可能性に賭けた。ウィンディー家の子供達はサイモン・アペのように群を抜いた成績を上げることはなかったが、勤勉に勉強し、アンブル村随一の教育家族となった。だが、ウィンディー家の子供達の世代では、中学を出ただけでは良くて会社の事務員、悪くすれば村へ戻って農業に従事するほかに道はなくなる。PNG官民の高位の職は独立期のエリートによって占有され、教育エリートに対する要求水準は年を追って高まり、PNG最高学府パプアニ

ューギニア大学を出ても失業しかねない時代となっていたのである。

だが、ビーチウッドの事務員となったアイエは野心を密かに育み続けた。アイエは吝嗇といえるほどに給料をこつこつと蓄え、2年後の1987年にはラエ・テクニカル・カレッジの会計士コースに入学する。アイエは勤勉に学び、ダンロップ社の奨学金を得て、1989年、首席でテクニカル・カレッジの会計士コースを卒業する。卒業するとダンロップ社のマウント・ハーゲン・オフィスに採用され、ハーゲン・オフィスの白人女性マネージャーから後任を任すという約束を受けた。だが、白人女性マネージャーが退職してオーストラリアに帰ると、縁故昇進で別の男がマネージャーに任ぜられた。これに怒ったアイエはダンロップ社を退職し、アンブル村に帰ったが、折から古着ビジネスを始めていたサイモン・アペはアイエの力量を惜しんでポート・モレスビーに降りてきて彼の古着ビジネスを手伝うように懇願した。経理の知識を欠いていたサイモンにとって、会計士の資格を持つアイエは不可欠な戦力だったのである。そしてサイモンが渉外を、アイエは経営をとという二元体制が確立した。だが、この体制も1992年のサイモンの第二夫人事件で壊れ、1993年、アイエはサイモンと決別して自らのビジネスを興すべく、ポート・モレスビー市内に万屋を開いた。電電公社を辞め、サイモンの援助で大学に入っていたアイエと同年の異母兄弟のエンバも大学を辞め、アイエのビジネスに加わった。更に、1991年中学卒業後、村に帰りブラブラしていたのをサイモンがポート・モレスビーに連れて来、大学予備コースへ入学していたサニも加わり、兄弟3人で商売を始めた。元手はサイモンから奪い取った2万5000キヌであった。しかし、店を建て一揃い商品をそろえたところで資本が尽きた。新たに商品を調達すべき自動車がなかった。ここでも、助力を与えてくれたのはエレペ・コロウィであった。彼女は小型のダットサンをアイエに与え、「あなた方は未来のある人だから、うまくいくにせよ失敗するにせよ、この車をあげるのです」と言った。この車でアイエとエンバは商品を調達すると同時に、ビン缶収集を行った。一方、サニは路上でビンロウジュ(PNG人が好んで噛む嗜好品。軽い興奮をもたらす)を売るなど、あらゆるビ

ビジネス・チャンスをとらえていった。アイエは商機を見るに敏で、経理コースで学んだ知識を生かして簿記も正確に取り、事業を順調に回転させていった。ウィンディ兄弟はその間、毎日の食事を乾パンで凌ぎ、鳥の股肉付ライスを食べるのは4週間に一度といったように節約につとめた。そして、朝は5～6時に起きて仕事を終えるのは夜の10～11時といった具合に猛烈に働いた。正直に、売り上げをくすねることもなく、兄弟一致協力してがんばった末、店をもう1軒ホホラ地区に持つことができた。そして、そこでは新たにタイヤ・サービスと弁当屋を始めた。また闇でビールも売った。こうして爪に火をとぼすようにして蓄えた資金と2軒の店を担保にして、銀行から借りた10万キナでアイエはパン工場を始める決意をした。1995年のことである⁽²³⁾。

パン工場を始めたのは幼時からアイエの親友で、父ウィンディ老人の母方の親族ジョゼフ・プルノおよび彼の一族がニューギニア高地の町々でベーカリー・ビジネスをして巨利を得ていたからである。

プルノ家がベーカリー・ビジネスを始めたのは1981年に遡る。当時、南高地州政府の官吏であった長兄のトロンベナ・プルノがバイブル・チャーチの白人宣教師から手ほどきを受けて、妻名義でサイドビジネスとして、州庁所在地メンディの町でメンディ・ベーカリーを始めた。メンディ・ベーカリーは成功を収め、トロンベナは弟のジョゼフにマウント・ハーゲン近郊でアワ・ベーカリーを開業させた。人口1万人（当時）を擁するマウント・ハーゲンに一手独占でパンやスコーンを供給したこのアワ・ベーカリーはメンディ・ベーカリーを遥かに上回る収益を上げた⁽²⁴⁾。アイエが1995年にポート・モレスビーでパン工場を始めるに際してノウハウを得たのは、このジョゼフ・プルノからであった。アイエはポート・モレスビーの北郊のゲレフ地区に巨大な倉庫を買い入れると、1台のミキサー、2台のパン焼き窯を備え付けた。ホホラ地区の店は異母兄弟のエンバに経営を任せ、タイヤ・サービスは実弟のサニに委ねた。そして3台の中古自動車を買ひ、ポート・モレスビー中の万屋（カンティーン）や市場に卸して回った。スコーン（丸パン）1

個30トヤ（当時30円）。都市近郊に農村地帯を持たないポート・モレスビーの市民達はそれまで朝食抜きか前夜の残りご飯を食べて勤めに出ていたが、1個30トヤという安価な朝食を得て、食生活が変わるほどの影響を及ぼした。1パッケージ10個のスコーンを1台の車が月～木曜には150パッケージ、金、土曜日には250パッケージを売りさばく。そして1日の売り上げは500～750キナにのぼった。3台の車は朝5時半に出発し、モラタ、トカララ、ホホラ、4マイル、2マイル、バディリ、コキ市場、コネドブ、5マイル、ゴードン市場、8マイル、9マイル、14マイルとポート・モレスビー中のカンティーンに配達して回り、夕方6～7時に工場に戻ってくる。そして1日の精算を終えるのは夜の8時頃である⁽²⁵⁾。1995年当時、他にスコーンを万屋や市場に売って回るパン屋はなかった。それまでは、パンは中流以上の市民が白人や華人の経営する近代的なスーパーマーケットで2斤単位で買っていくもので、下層民の口にするものではなかったのである。アイエはそこに目を付け、下層民の間に巨大な潜在的需要を掘り当てた。あるいは下層民の間にパンに対する欲求を開発したと言った方が良いかもしれない。いずれにせよ、ポート・モレスビーの下層民を顧客とするスコーン・ビジネスはアイエの一手独占販売だった。アイエは早速、増産態勢に乗り出し、マイクロバスを2台買い入れた。これで1台500キナの売り上げに成功し、売り上げ高は1500～2000キナへと一気に拡大した。それでもまだまだ供給不足と見てとったアイエは異母兄弟のエンバにもパン工場をスタートさせ、合わせて3000～4000キナの売り上げを記録するに至った。邦貨にして40万～50万円である。人口20万のポート・モレスビー市民の内、1万人はウィンディ兄弟のスコーンを食べていたこととなる⁽²⁶⁾。

ウィンディ兄弟の成功の鍵は、くり返し言うが、それまで上中流階層向けに大型スーパーマーケットで売られていたパン食（それは2斤売りで、購買者は冷蔵庫を持っていることが前提となる）をスコーンという丸形パンの形にして下層民の食料とすることに成功した点にある。それまでは朝食を欠き、空き腹をかかえて一日を送っていた者達の潜在需要に見事マッチしたのである。

ウィンディー一家の成功を見て、スコーン・ビジネスに新たに参入する者達が続々と現れてきた。バターカップ・カンパニー、ハイランド・フレッシュ、ゴードン・ベーカリー、テイスティー・ベーカリーなどである。こうしたライバル達とのしのぎを削る競争が始まった。カンティーン（万屋）にタッチの差で先に着いた車がスコーンを卸すと、後から来た車は次のカンティーンを求めて走らなければならないのである。しかも、セトルメントや自家製のスコーンを作る小さなベーカリーも簇生してきた。アイエの工場は2交代制で24時間稼働となった⁽²⁷⁾。

アイエはこの過当競争状態から抜け出す策として、パプアニューギニア防衛軍の糧食の供給へと目を向けた。4社競合の末、見事に落札し、これによって1日850キナの売り上げを確保することができた。これにより、激しい競争の中、ウィンディー一家のベーカリーは安定した収入源を得ることに成功したのである。しかし、1997年に成立したビル・スケート政権の経済運営の拙劣とこの国の輸出の8割を占める金属・エネルギー資源の価格低迷のあおりを受け、パプアニューギニアの通貨であるキナは価値低落が著しく、1997年の1キナ=1米ドルから1999年に入って1キナ=0.4米ドルにまで下がってしまった。その結果、輸入品である小麦粉10キログラムが30キナから50キナに、イースト1キログラムが60キナから110キナに、食用油1缶が50キナから80キナにこの1年で値上がりしてしまい、利潤は大きく落ちた。そこでアイエは異母兄弟のエンバと図って、ベーカリー・ビジネスを縮小して、アイエのゲレフ・ベーカリーが一手に引き受け、エンバはワイガニ地区にポート・モレスビーで初のパプアニューギニア人経営による大型スーパーマーケットを開店する。そして、ゲレフ・ベーカリーは弟のクゲコに委ね、自らはアンブル村に帰ってブリティッシュ・ペトロリアムの給油所を設立するという方針を定めた。すでに述べたように、村から至近の距離にあるウエスト・カンビア地域で金・銀・ダイヤモンドの大鉱脈が発見され、遠くない将来、アメリカの鉱山会社が採掘を始めることが明らかになっているからである。採鉱が始まれば一夜にして数千人の労働者を擁する鉱山町が出現する。

そのため、アイエは単に給油のみならず、鉱山基地の技術者・労働者のために、衣食をはじめとする日用の生活物資を供給する店舗の設立を計画し、用地買収に動いている。ビーチウッド製材所が閉鎖されたため、アンブル村には遊閑地ができていのである。そして、アイエとブリティッシュ・ペトロリアムの仲を取り持ったのが、以前にもウィンディ兄弟を助けたエレペ・コロウィであった⁽²⁸⁾。

一方、エンバのスーパーマーケット経営安定のため、これまで華人商人によって賄われてきた防衛軍への米や缶詰、肉といった糧食および生活必需品の調達にとって代わるため、これもまた入札を行った。防衛軍にとっても食料調達を華人の手に委ねるよりは自国民に委ねた方がナショナリズムの見地から見ても好ましい。ウィンディ一家にはすでにパン・スコーンの調達という実績がある。防衛軍はまずパプアニューギニア第二の都市ラエの兵営の食料調達の許可をアイエに与えた。ラエには、エンバの舅が観光用ロッジを営み、製材所を運営し、市内バスを運行し、といったようにすでに手広く商売を行っている。アイエは、そのコネクションを生かして、まずラエに大型スーパーマーケットを建てることに方針変換した。このように商才に長けたアイエは、潜在的需要を見つけてはあらゆるコネクションを総動員して確実にビジネスに結びつけてゆく一方、次々回、2007年の総選挙に出馬する態勢を着々と固めつつあるのである⁽²⁹⁾。

第6節 インボング・ビジネスマンの世代交代とその特質

我々はインボング族のビジネスマンを3世代に分けてそのライフ・ヒストリーを詳細に追ってきた。

これら3世代のインボング・ビジネスマンの特徴を浮かび上がらせるために、彼らのキャリアを特徴づける要素を抽出し、図表化してみよう(表1)。

これらの3世代を比較してみると主な相異はまずその活動した時代に現れ

表1 インボング・ビジネスマンの3世代の特徴

	グレイミー・ワレナ	サイモン・アベ	アイエ・ウエンディ
学校教育	カウペナ小→CLTC →通信教育	イアリブ中→タリ中 →マダグ国立高→ UPNG	カウペナ小→パバラブ ル中→ラエ・テクニカ ルカレッジ
外国人とのコネクション	カウペナ・ミッション・ ステーションの白人 ビーチウッド製材所の 白人	ポート・モレスビー の帰化白人ロバート・ サックリング	—
政治上のコネクション	人民進歩党員として2 期国会議員	国会議員アンソニー・ テモの後援会長・ 秘書	PNG 防衛軍の納入業 者
時代	1969～1987	1990～1999	1992～
キリスト教	バイブル・チャーチ カウペナ・ミッション・ ステーション	カソリック→棄教→ ペンテコステ→棄教	バイブル・チャーチ 1999年改悛
ビジネスから政治への移行	1977 (インボング選挙 区当選)	1997 (ポート・モレ スビー北東選挙区落 選)	2007 (インボング選挙 区立候補予定)
親族・地縁関係	モカゴモイ部族	アンブプル村, タン ビ父子, ウィンディ 兄弟, オボガイ氏族	ウィンディー家, アン ブプル村, ブルノー家, ルーベン・カール

(出所) 筆者作成。

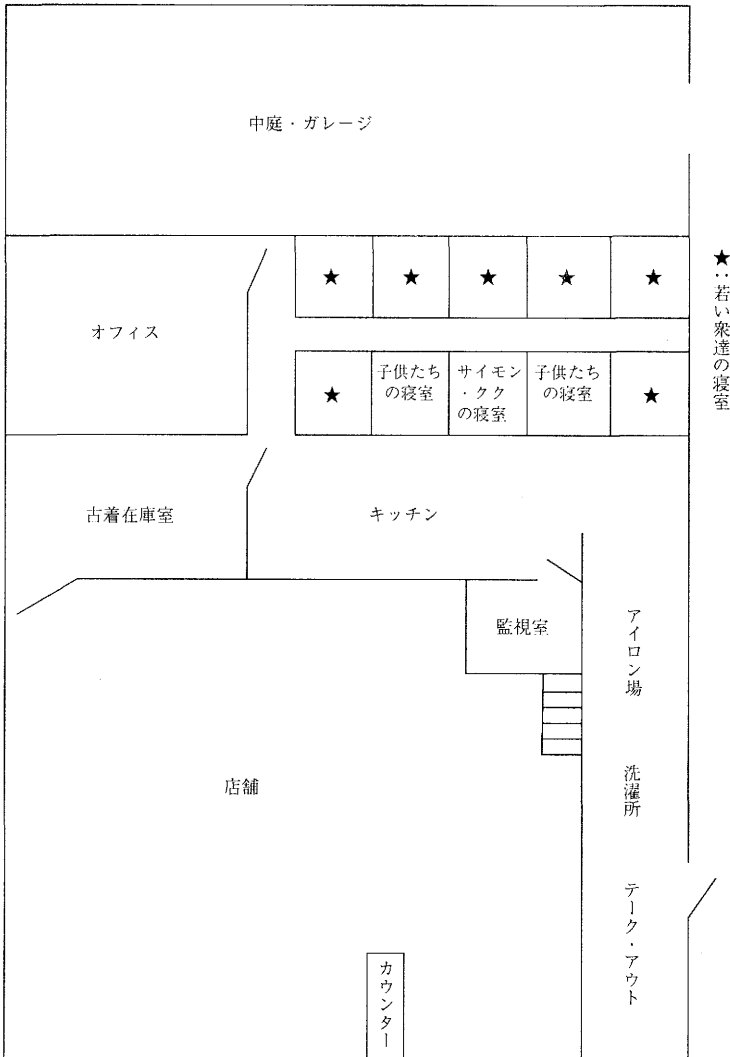
る。インボング文明化第一世代のグレイミー・ワレナの主たる活動期間は1960年代末から1980年代末にかけての20年に及ぶ。その間には1972年から1975年にかけての独立移行期がはさまれている。彼の現在では相対的に低い学歴（通信教育による中学卒業資格）は、当時では十分に高い教育歴であった。そして、独立に伴い、白人が政官財界から退いていく中で、そこに生じた空白を埋めるべく、教育エリートが急速に地位上昇し、近代セクターの中に広がっていったのはグレイミー・ワレナの世代であった。グレイミー・ワレナと同級生であったウィワ・コロウィは後にパプアニューギニア第6代の総督（Governor General）にまで登りつめる。総督とは言うまでもなく、英国女王

を名目上の元首とする諸国で、女王に代わって国事行為を執る元首代行者である。位人臣を極めたとはウィフ・コロウィのような人間を指すのであろう。石器時代の村に生を享けた彼が人口400万の近代国家の元首代行となったのだから。グライミーもそうした時代の急激な上昇気流を背に頭角を現した人物であった。そして彼のビジネス上の成功で看過できないのは白人とのコネクションである。インボング族の誰もがビジネスで成功を収めたいと願い、換金作物栽培や万屋の開店に奔走しながらことごとく失敗していった中で、彼一人が着実にビジネスに成果を挙げ、わずか22歳でインボング一のビジネスマンと謳われるまでになったのも、一に、彼がその第一の使徒となり、その愛顧を一心に受けたカウペナ・ミッション・ステーションの白人宣教師達の助力に負うところが大きかった。彼らはグライミーに資本を与え、ビジネスのノウハウを教えるなどあらゆる援助を惜しまなかった。彼が僻陬のインボングの地にありながら着実に近代ビジネスに成功を収めていったのは、この白人とのコネクションが大きい。第二に、彼のビジネス上の成功を確実にしたのは政官界とのコネクションであり、その結果としてのビーチウッド製材所の誘致であった。彼はその主要株主となることによって、貨幣経済の基盤の狭小なインボングの地にあって巨額の収入を確保したのである。それは彼の最大の収入源であったが、アキレス腱となったこともすでに述べた。製材所の地権者との争いから国会議員の職を失い、政官界とのコネを絶たれたグライミーに追い打ちをかけるように、環境破壊の名の下にビーチウッド製材所が1992年に閉鎖されると、グライミーはわずかなビジネスを営む田舎ビジネスマンの一人に転落してしまった。

世代は15年と大きく異なる（変化の激しいパプアニューギニアでは）サイモン・アペも教育エリートである。全国に4校しかない国立高校に選拔され、更にはパプアニューギニア大学に悠々合格したサイモンは知的にも学歴上でもグライミー・ワレナをはるかに凌ぐ。しかし、サイモンは遅れてきた世代であった。彼が世に出たときには政官界の上層部はすでにグライミーの世代によって占められ、しかも年齢差が小さいばかりに職階上昇の見込みは皆無

に等しかった。その壁をグライミー世代のテモと結ぶことにより、突破しようとしたのである。アンソニー・テモを国会議員にすることによって、政界とのコネクションを得、更に政治家の紹介で白人実業家とのコネクションを獲得、更には、テモの保証で銀行の融資を受けることにより、サイモンはビジネス・チャンスをつかんだ。古着ビジネスのアイデアをサイモンに授け、オーストラリアの古着会社との渡りをつけてくれたのはパプアニューギニアに帰化した白人実業家のロバート・サクリングである。そして、ビジネスをスタートさせる資金の融資を保証してくれたのはテモであった。このように、サイモンも教育エリートであり、白人および政官界とのコネクションによって、ビジネスを興したという点ではグライミー・ワレナと共通している。二人の相異はグライミーが地元インボングの地にビジネスを集中させたのに対し、サイモンはインボングの地を飛び出し、ポート・モレスビーでビジネスを始めたことである。人口2万余り、収入源は年平均200~500ドルのコーヒー栽培を主とし、生活物資は自給自足できるインボング族の購買力はきわめて限られたものであり、しかもすでに村々に万屋がひしめき合っている。それに対し、ポート・モレスビーには20万人の人間が住んでおり、しかも衣食住の全てにわたって貨幣経済に依存しないでは生きてゆけない。そのポート・モレスビー市で生活必需物資の衣料を安価で供給する古着ビジネスを始めたのがサイモンの成功の鍵となったのはすでに見た通りである。サイモンは都市における巨大な潜在的な需要を掘り当てたのである。それが彼の急速な勃興をもたらした。瞬く間にサイモンの古着店は殷賑を極めた。ここに興味深いのは、サイモンが自らのビジネス組織を形成するに際して、テモの選挙運動の集票マシンとなったアンプル村の若者達をそっくりそのままビジネス体の中核としたことである。そして、周辺メンバーもインボング族の若者達で固めた。こうして、サイモンの古着店はインボング族のポート・モレスビーにおける飛び地となった。それは文字通りの意味で飛び地となったのである。サイモンの古着屋は大学の大讲堂分くらいの売場の裏にサイモン一家と中核従業員の住む部屋が八つあり、それらはインボングの若者で固

図1 サイモンの古着本店 (パディリ)



(出所) 筆者作成。

められていた(図1)。そして、若者達の寝所にはM16, ポイント22, AR15といったライフルやショットガンが蓄えられており、サイモンの店の巨額な収益を狙う強盗団やサイモン本人を狙う政敵と戦う態勢が常時とられていた。部屋の結構もサイモン一家をインボングの若い衆が取り巻く形をとっており、サイモンの古着店は同時に主サイモンを中心とする砦であったのである。そして、サイモンとインボングの若者達の間には原初的な主従関係が生じつつあった。インボング族においては基本的には男たちの間には同等の関係が支配する。それがサイモンが都市でのビジネスを組織してゆく中で、日本の中世武士団のような主従郎党関係が発生したのである(サイモンがウィンディ兄弟や従弟のナーカノリを銃を放って追い払ったり、ランドクルーザーのタイヤを焼いて威嚇したりしたことは伝統的な親族・地縁関係からは考えられない強圧的行為である)。サイモンの古着会社は実は経済団体であると共に武装・防衛集団でもあり、選挙の集票マシーンとしても回転する政治組織でもあるという特異な集団だったのである。これは700の民族が集まるポート・モレスビーにおいて信頼できるのは同一民族の味方クランだけであるというサイモンの事情と、刺激に満ちた都市生活を味わいたいという婚姻前の若者達の欲求が合致して生まれた思いもよらぬ結晶であった。

しかしながら、このパプアニューギニアにおいて突然変異のように出現した「ビジネス武士団」は、すでに述べたように市場で古着を商う商人が大量に古着ビジネスに参入したことによって、その成立と同様に急速に解体してゆくのである。それにはサイモンが本質的に企業家(entrepreneur)ではなかったことが大きくあざかっている。サイモンの資質は本質的に政治家であり、教育エリートであり、経済的本能を備えたシュンペーター言うところの企業家ではなかったのである。激しい競争にさらされて為す術を知らず、酒・女・賭け事に溺れてゆくサイモンが最後に事態を打開するために採った手段が国会議員選挙出馬であったのはそのことを物語って象徴的である。総選挙敗北後、サイモンの一族郎党は1人去り、2人去りし、ついに1999年9月には出身クランのオボガイ氏族の若者2人が残るのみとなった。こうして、

ポート・モレスビーにおけるインボングの主要な飛び地の一つは消滅したのである（彼の第2人も村へ去った）⁽³⁰⁾。

それに相前後して新たにインボング族の飛び地が誕生した。すなわち、ウィンディ兄弟のベーカリー・ビジネスである。司令塔の役割を果たすのは長男のアイエである。アイエの経歴はグライミー・ワレナやサイモン・アベとは大きく異なる。アイエの中学校を了え、テクニカル・カレッジを終了したという学歴は、村の文脈では高学歴だが、パプアニューギニア大学やラエ工科大学などを卒業する大学卒業者が年8～10名ほどいるインボング族全体の現下の状況から見ると教育エリートと呼ぶにはあたらぬ。彼のキャリアの始点がビーチウッド製材所の事務員であったことから彼が教育エリートとは程遠いキャリアをたどってきたことがわかる。そして、僅かな給料を蓄えてテクニカル・カレッジ（2年課程であり、PNGの文脈では専門学校といったニュアンスである）の会計学コースに入学した経歴からも窺えるのは、学校教育のベルトの上に乗って頂点に立ったエリートというよりも独立独行の男（self-made man）の像である。彼は中学を卒業した時点で自らの天職をビジネスと思い定め、その決意に基づいて人生を形作ってきたのである。事実、アイエにはサイモンには欠けているビジネス本能とでも呼ぶべきものが備わっていた。ポート・モレスビーでスコーンを売り出したのも、彼がポート・モレスビーの中下層民の朝食への潜在的需要を見抜き、それをニューギニア高地でベーカリー・ビジネスを展開していた父の母方クランで幼時からの親友であったジョゼフ・プルノのノウハウとサイモンから奪取した2万5000キナの資金に結びつけて具体化する能力を有していたからこそ可能となったのである。そして、スコーン・ビジネスが成功を収め、それを見た模倣者が大挙してスコーン・ビジネスに参入してくると、逸早く、軍へのパンとスコーンの納入という方策によって収益を確保し、更にそこで生まれた防衛省の兵站部からの信頼を活用して、パプアニューギニア第二の都市ラエの兵舎への食糧供給を一手に引き受ける許可を得るや、ラエに新たにパン工場と食糧卸店を造るというように、ビジネス・チャンスを目ざとく見つけてはそれを形

にしていく才能に恵まれてビジネスを拡大していったのである。これを、サイモンが激しい競争にさらされたとき、為す術なく快楽に逃避していったことと比べる時、アイエの企業家としての洞察力、そして柔軟にあらゆる手持ちの札を動員して事に対処してゆく行動力がより鮮明になるであろう。村の近傍に金・銅・ダイヤの大鉱脈が発見されると鉱山会社に供給するガソリンスタンドを建てる計画を立て、早速、旧知のエレベ・コロウィのコネクションを通じてブリティッシュ・ペトロリアムと契約を結んだのもアイエの企業家としての透察力と行動力を示している。

こうしたアイエのビジネス拡大を制約する事情があるとすれば、彼が展開してゆく企業のマネージャーの不足であろう。

アイエのビジネスは基本的にファミリー・ビジネスであり、ゲレフ・ベーカリーは実弟のクゲコ、ワイガニ・ベーカリーは異母兄弟のエンバ、自らはラエのベーカリー兼食糧卸店の経営を受け持つ態勢になっている。残る兄弟の内、サニは酒の味を覚え横領をくり返し、誅首され、モスピーは小学校中退で村の一家の土地を守っている。また、妹ルジの夫ケンも横領が発覚して誅首された。一番下の弟シドニーはまだ小学生であり、異母妹エレンとノンブリはまだ嫁していない。事業の展開速度に、安心して委ねられるマネージャーの数が追い付かないのである。

マネージャーになるには一定の教育（エンバは中学卒、大学予備課程中退、クゲコは私立名門校ポート・モレスビー・グラマー・スクール卒）を受けて近代セクターに参加できるだけの知識を持っていることと、勤勉、自立、正直といった倫理的資質が求められる。こうした二重の基準を満たしているのはアイエ以外にはエンバとクゲコしかいないのである。たとえばゲレフ・ベーカリーのマネージャーをしているクゲコは朝4時に起き、パン焼き職人を監督しながら、スコーンが焼き上がるごとに袋詰め労働者にビニール袋に詰めさせ、5台の車に一袋10個のスコーンを次々と入れて送り出し、自らもトラックにパンとスコーンを満載すると軍の兵舎へと納入しに行く。納入を終えると工場に戻り、機械のチェックを行う。それが終わると前日の売り上げを銀

行に預けに行き、再び工場へ戻ると、翌日のパンとスコーンの原料（小麦粉、イースト、塩、食物油など）をチェックし、パン職人にミキサーにかけさせる。スコーンを卸して回ったドライバー達が夕刻集金して帰ってくると売り上げを紙幣、硬貨ごとに振り分けさせる。そしてそれを集計し、紙幣、硬貨ごとに束にして麻袋に入れ、翌日銀行へ持っていく準備をする。こうしたルーティンを終えると夜8時になっている。その間に、給料支払い、電気・水道料金支払い、原料購入なども行うと一日16時間ほとんど休みなく働き続けねばならないのである。こうした過酷で単調な長時間労働を毎日行っているクゲコの月給は160キナ（6400円）である⁽³¹⁾。衣食住はアイエが保証しているといってもその収入は驚くほど少ない。そういう点において、アイエは非情なまでに吝嗇である。こうした容赦ない搾取に耐えられるのは、一つにはファミリー・ビジネスであるという自覚があるが、それと同時に強固なキリスト教信仰が支えとなっている。サニとケンが売上金を横領してマネジメントから脱落していったのは、クゲコやエンバの持っている強烈な信仰心を彼らが欠いていたことが決定的な要因となっている。

アイエの工場兼住居（2階）はゲレフのバイブル・チャーチの教会と隣り合わせになっており、アイエ、エンバ、クゲコは毎日曜日、朝と夕方の礼拝に出かけるのは勿論、ゲレフの住居に住むアイエとクゲコは火曜ごとに信者仲間と共に、ゲレフの教会から、牧師となったアンプル村出身（クリガイ氏族）のサリス・マロワを家に呼び、共に歌い、説教を聞き、お祈りをする。アイエは1999年5月に悔い改め（すなわち、教会の会衆の前へ出て、これまでの罪を告白し、これからは神に仕えることを誓う儀式）を済ましたばかりだが、今では旧約申命記26章の命ずるところに従って、儲けの10分の1を教会に寄進している。アイエは自分たちの成功は神の祝福を受けたものだから、儲けの10分の1を返すのだという⁽³²⁾。そこにはインボン族の伝統的な互酬の観念が見え隠れするが、クゲコの信仰はより純粋で強固なものである。クゲコによれば、神は信ずるものの霊とともにあり、信者の行いは霊を通じて神が示してくれる。それゆえ、神と共にあれば全てはうまくゆき、あらゆる事

は可能である。自分たちが神を信じ奉るから、神は自分たちを祝福してくれるのだ（アイエの論理とは逆になっていることに注意されたい）。自分は神に献身している。神の意に従い、神が自分に指し示してくれる道を歩み、従ってゆくのみである。自分の信仰は強く、二度と罪を犯すつもりはない（クゲコは1998年3月に改悛した）。だが、自分は説教者や伝道者になるつもりはない。エレミア記にも言う通り、神は各人が母胎にある時、すでにその者のたずさわるべき仕事を定めておられる。神は各人にその天職（クゲコはミニストリーという言葉を用いたが、マックス・ウェーバーならさしずめコーリングと言ったところであろう）を定めておられる。自分の天職はサリス・マロワのように聖職者になることではなく、ビジネスマンとして教会を建てたり、伝道者のために旅の蓄えを調達したりして、神の仕事を支えることである。神は自分を創造してくださり、自分の「生命の書」を持っておられる（the book of life。すなわち天国へ入れる人間の名を載せた書物。救済予定説の根拠である）。それゆえ、自分は強固な教えを持っているのだ。そして自分には人生の目標がある。神の御業を支えるという目標が。そうした目標を持たぬ者は自分の人生を無価値なものと考え、目標に向かって積極的に働きかけてゆくべき計画を持たない。それは彼らが、自分たちの生命の中にキリストを持っていないからだ。それゆえ彼らにとって人生は無なのだ。それゆえ自暴自棄になって罪の道に足を踏み入れていくのだ。自分は義しい行いをし、真実を語り、正直に行動し、清浄な人間として天国へ行きたいのだ。正直で信仰深く。人も言う通り、一生懸命働いたならば、後には良い結果が伴うのだ。そうしてこうした神への献身があれば、たとえ貧しくとも自制、自尊、自信の念を持ち得るのだ。自分はこうした考えを神の言葉から得た。神は自分に多くのことを教え給うた。自分は神の言葉を得て、神の言葉が自分を支えてくださるのだ⁽³³⁾。

二十歳前の青年の口から出た言葉とは信じ難いが、こうした信念がクゲコの過酷なまでの禁欲と自制と勤労を支えているのである。クゲコ自身も言うように、「もし自分がかつてのように不信者だったなら、自分は荒々しい人

間となっていたらう。自分はビールを飲み、横領し、アイエやエンバを殴りつけているだろう」⁽³⁴⁾。

クゲコの現世での目標は自分の家と車と家族を持つというきわめてつましいものであるが、アイエは遥かに野心的である。彼の最終目標はグライミーやサイモン同様、自分かエンバが国会議員になることである。そのため、エンバはモラタ地区に大きな家を建て、ポート・モレスビーに出てきたインボング族をもてなし、アイエ自らは村でガソリンスタンドと食堂付きの大店舗を建て、サービスをして、インボングの衆の間に名を高らしめる⁽³⁵⁾。

1999年9月、ポート・モレスビーで賑々しく執り行われたバイブル・チャーチのパプアニューギニア宣教50周年 (golden jubilee) 大集会では早速、アイエとエンバは自宅を開放し、この祝賀に集まってきたインボングの信徒達を泊めて、食事を供し、送迎を行った。アイエの、目的に向けてあらゆるチャンスを逃さず、最大限に生かすというビジネス上での資質は、ここでもいかに発揮されているのである⁽³⁶⁾。

第7節 都市におけるバイブル・チャーチとインボング族

1999年に宣教50周年を迎えたパプアニューギニア・バイブル・チャーチ(独立後、ミッションからチャーチに変わった)は、まずメアミ族の地パバラブルにミッション・ステーションを開いて、隣接するインボング族、カゴリ族、ウィル族へと教線を伸ばしていった。植民地時代は他の宣教団と激しく競い合いながらこの四つの民族の宣教に集中し、足場を固めることに専念した。

こうして足場を固め終え、現地人牧師や伝道師を養成すると、ポート・モレスビーやラエやマウント・ハーゲンといった都市に進出を始めた。それは一つには教線を広げるためでもあったが、それらの都市へ出ていった信者達の宗教的要求を充たすためでもあった。そのため、都市の教会は一種、県人会の様相を呈した。とりわけ、互いに言葉が通じ合い、文化的要素を多く共

有するメアミ、カゴリ、インボングの信者達の間では、宗教的交流と共に礼拝式が終わった後に、互いの近況を語り合う社交の場として機能した。そうした社交の場の中からパートナーを見つけて結婚するカップルも現れた。そうして、そうしたカップルが結婚するときには、都市中から信徒が贈り物を持って集まり、カップルの親族は主催者として都市へ駆けつけ、祝いの客をブタの土蒸し料理をはじめとする伝統的な祝いの料理と都市で始まったフルーツや焼き飯などの料理でもてなす。また、死者が出ると、信者達は金や米、パン、コーラといった食物を持って死者の家に集まり、死者の親族に与え、弔辞を述べ、最後は牧師の追悼の辞とともに祈りを行い、教会の若者組の演奏に合わせて歌を歌い散会する。こうして都会風の変容を受けながらも、村で行っていた婚儀や葬儀は都市の中で生き続けているのである。

このようにバイブル・チャーチはインボング、メアミ、カゴリの信者達に、故郷との紐帯と文化的アイデンティティを、都市という異郷の中で都会風のアレンジを加えながらも維持・存続させていく役割を果たしているのである。都市の中で散在して暮らしているインボング、メアミ、カゴリの信徒達はバイブル・チャーチを通して拡大したコミュニティを形作っているとも言えよう。

更にクゲコの言葉にも見られるように、新教福音派に起源を持つ強固なプロテスタントのセクトであるバイブル・チャーチは信徒を都会の刺激と誘惑から絶縁する禁欲・自制の精神的被膜を成している。欲望をそそる無数の魅惑的商品、そして酒、女、スロット・マシーンという、精神を弛緩させ、惑溺させる魅惑は都市に満ち満ちている。しかし、その魅惑の園に足を一步踏み込めば、そうした文明のもたらす誘惑に耐性のないニューギニア高地人は限りなく精神が弛緩し、サイモンのように酒浸りになり、女色に溺れ、スロット・マシーンに入れ上げるようになる。アイエによれば、サイモンは旧約士師記中のサムソンのようだという。神はサムソンに聖霊を与え、彼に怪力を与え給うた。ところが、サムソンが美女デリラに惑溺するや、聖霊はサムソンを去り、サムソンは自慢の怪力を失った。サイモンも同様だとアイエは

言う。あれほど繁盛していた古着ビジネスはサイモンが若い第二夫人をめとると同時に没落に向かい、いまや破産に瀕しているのではないかと。サイモンも商売が繁盛していたときは、ボロコ地区の公園で道行く人に説教をしていた程の熱心な信者だった。神はそれを嘉し給うてビジネスを繁盛させ給うたのに、サイモンは女の色香に迷ったため、転落の一途をたどったというのが、アイエの理論である⁽³⁷⁾。一方、クゲコによれば、酒は人の脳をだいなしにする。アルコールは人をへべれけにし、中毒にし、それから逃れられなくさせる。そして、酒によって人は怠惰になり、酒のためなら悪の道にも進んでいくようになる。サニがそうだった。酒の味を覚えてからは、店の売り上げをくすねるようになり、挙げ句の果てが首になった。サイモンもそうだ。昼間からへべれけになり、酒場で大暴れしては警官に殴られて留置所に入れられたりしている⁽³⁸⁾。

ニューギニア高地人は伝統的に酒の文化を持っていなかった。酒は白人文化とともにニューギニア高地に入ってきたのである。それゆえ、体質的に酒に弱く、いとも簡単に酔ってしまい、日常生活を窮屈に律している理性と意志のたがから解放され法悦の境にはいる。フロイト流に言うならば、現実原則の軛から脱し、思うさま快感原則に浸ることができるのである。1995年、アンブル村がハイランズ・ハイウェイの拡張工事で政府から補償金を得たとき、道路沿いにコーヒー園を持っていたテレマは巨額の補償金を手にして、マウント・ハーゲンのホテルを2室貸し切り状態にして1部屋ごとに女を1人ずつ住ませ、日ごと女達とともに酒びたりで半年を過ごした。こうして彼は手にした5万キナ（600万円）の金を費消してしまったのである。コーヒー園からの収入の100年分を半年で蕩尽したことになる⁽³⁹⁾。

このように、酒と淫蕩を禁ずる戒律を持つプロテスタント系の教会の信徒でない者はこうしたすさまじい蕩尽を簡単に行ってしまう程、酒と女はニューギニア高地人を盲目にしてしまう強烈な誘惑なのである。

こうした激しい蕩尽をクゲコらバイブル・チャーチの真剣な信徒の強烈な禁欲と並べてみると、都市部においてバイブル・チャーチが急速に繁茂し

ている理由の一端が窺われるというものであろう。

事実、1985年にはポート・モレスビーに一つしか教会のなかったバイブル・チャーチは1999年には七つの教会を擁するまでになったのである。それは、一つにはインボング、メアミ、カゴリの諸族のポート・モレスビー流入の増加があるが、他方ではポート・モレスビーに住む他民族をバイブル・チャーチが魅きつけつつあることも一因となっている。このことは火曜日のアイエの家での祈禱集会でも、8人の参加者のうち2人はそれぞれ東セピック州出身の男とガルフ州出身の男であることから窺われる（残りの6人はインボング族である）。未だ、インボング、メアミ、カゴリ出身者とその他の民族出身信徒との間に日常的な交流は見られないが、少なくとも牧師・伝道師の大半を占めるインボング、メアミ、カゴリ族出身の男たちが聖書をテコに都市に住む他民族出身者に積極的に働きかけ、自らの精神的圏域に引き入れようとしていることは明らかである。そして教会に儲けや収入の10分の1を寄贈することなどによって彼ら牧師・伝道師の都市布教を後押ししているインボング、メアミ、カゴリの都市平信徒達がそうした積極的関与に間接的に参加していることも疑いない。バイブル・チャーチはそうした意味で、都市におけるインボング、メアミ、カゴリの信徒共同体が、同じく都市に住む他民族に改宗という形を通じて積極的に関与してゆこうとしている回路であるとも言い得るのである。すなわち、バイブル・チャーチは都市におけるインボング、メアミ、カゴリ族の文化的アイデンティティを維持し、客体としての民族共同体を保持するのみならず、その教義と儀式を通じて、インボング、メアミ、カゴリ族が能動的主体として都市に関わっていく媒介となっているのである。

第8節 ウィワ・コロウイ総督の「膝折り作戦」

パプアニューギニア第6代総督となっていたサー・ウィワ・コロウイは

1996年11月19日総督官邸からパプアニューギニア国民に呼びかけを行った。

その呼びかけの中で、ウィワ・コロウィ総督はパプアニューギニア国民の神に対する霊的和解の望みはもはや手遅れとなりつつあり、自分は1994年、すでに国の指導者達に神の主権と統治権を認めよと呼びかけたはずだと時の政府に対して非を鳴らした。そして、治安問題の永続的解決、社会的、経済的、政治的不安の解消は、もはや政府が行っているような開発プロジェクトに小切手を切ることでは不可能であり、悔い改めと自分たちの霊的状态を認識することによってしか到達することはできないと強く訴えた。

ウィワは続けて「調和と平和は我々にはやって来ない。我々の未来に対する明るい希望は急速に消え去ろうとしている。なぜなら、我々は霊的に病んだ国民だからだ」と警鐘を鳴らし、「内閣、立法府、そして全ての政府機関は神を恐れるべきだ」と警告を発した。

「霊的に死滅しつつある国の徴候は、治安問題、レイプ、押し込み強盗、銀行強盗、残忍な殺人、指導者への無礼、その他に反映されている」とウィワは断じ、そうした悪の横行を「国の霊的な死」の徴として捉える。そうした悪の中には、ウィワ自身のインボングの2階建ての自宅が何者かに放火され焼失した事件も含まれているだろう。

ウィワは、パプアニューギニアの現状を社会・政治・経済といった近代的概念で捉えるのではなく、徹底して霊的見地に立って解釈していく。その上でウィワは、国の指導者達は神の存在を認め、国の運命は神の手に握られていることを知るべきだと訴えるのである。

「神は12億キナ个国家予算を通して働きかけることはできず、霊的真空状態や国が策定する空虚な政策一覧を通して動こうともなさらないのだろう」と、悔い改めてパイブル・チャーチの懐の元へ帰ったウィワ・コロウィ総督は近代的政治・行政システムに対するあらわな不信感と拒絶の言葉を叩きつける。

人間理性に依拠する近代国家は、人間の知を神の叡智に比して無に等しきものと見なす聖書的観点から全面的な否定を受ける。

「我々の心が悔い改めぬままでは、我々が我々人間の知性と能力に依存している限り、全国民は悲しい歴史を持つであろう。」

彼の言葉には旧約詩編の思想が高らかに鳴り響いている。

そしてこう言う。パプアニューギニア国民が期待されているのは「神の存在を認め、神を我々の生活の中に招き入れ、我々の努力を導き給うよう頼みまいらせ、この国を2000年に至るまで導いてくれるよう頼みまいらせる」ことであると。

ウィワが2000年までと期待をきったのは、西暦2000年にはヨハネ黙示録に詳らかに描かれた世界の終末が到来し、偽キリストが現れ、神の軍勢とサタンの軍勢の間でハルマゲドンが戦われ、神の勝利の内に最後の審判が行われるという信念が福音派・原理主義教団やペンテコステ派諸集団において広く行き渡っていたからである。

そして、ウィワ・コロウィ総督は「我々の霊的状态について知らぬ振りをするのは高くつく人間的誤ちであり、そのことによる国民的不名誉は我々と我々の子供達にとってもあまりに高くつく」と言った後、何が胸を去来したのか、突如その場に泣き崩れ、数分間泣き続けたのである。

そうして一しきり泣き続けた後、集会に集まった人々を国のための祈りに導いてこの劇的演説は終わった⁽⁴⁰⁾。

この劇的演説を皮切りに、「膝折り作戦」と呼ばれる一大宗教運動が燎原の火の如くパプアニューギニア全土にまたたく間に広がった。

それは1997年6月の総選挙において、モーゼやダビデのような神の付託を受けた者が国会議員員に選ばれるようひたすら祈り続けようという趣旨の運動であった。「膝折り作戦」とはお祈りの時の膝を折る姿勢をとって名付けられたものである。そして、この作戦の最初の「突撃」は1997年1月4日に始まり、7日間の祈禱の日々を過ごした後、全国一斉にこの国の霊的状况について嘆き悲しみ、悔い改めを行うというものであった⁽⁴¹⁾。

そして、その日に向けて、2万7000の小冊子が国中に配られ、更にパプアニューギニア最大の日刊紙『ポスト・クーリエ』紙の後援によって、折り込

み広告が国中の『ポスト・クーリエ』購読者4万8000人に配布された。

この運動はパプアニューギニア全土を席捲し、1997年総選挙のキャンペーンでは自分の顔写真を写した選挙用ポスターにイエス・キリストの絵姿を加えるものが続出した⁽⁴²⁾。

このように膝折り作戦は教派を超えた運動としてパプアニューギニア全土を風靡したわけだが、その幕を切って落としたのがインボング族出身のバイブル・チャーチ信徒であるウィフ・コロウィ総督であったことも、都市移住のバイブル・チャーチ信徒の能動的主体性がいかにラディカルなものであるかを余す所なく伝えるものである。彼は総督という巨大な政治的・精神的権威を介して、パプアニューギニア全国民に霊的覚醒と国を神に従う体制にすることを強く促したのである。それはウィフに至るまでの歴代の総督がおよそ成し得なかった総督としての強力なイニシアティブの発揮であった。

このように、原理主義的キリスト教団が特定民族と結合し、そのアイデンティティとなったとき、そのアイデンティティは自民族の利害を守るという本質的に受け身の姿勢を突き破り、他民族・他信徒・非信徒に積極的に働きかけ、自らの信仰体系に包摂しようとする使徒的性格を担うに至るのである。その使徒的性格から、インボング、メアミ、カゴリ族はカウゲル河流域の本貫の地から他郷へと進出してゆく心的起動力を受け取るのである。そして、己々はその天職（クゲコという言葉を用いるならミニストリー “ministry”）に応じて、牧師・伝道師から平信徒に至るまで、総督からパン工場のマネージャーに至るまで、神から与えられた福音を宣べ伝える役割を果たさねばならない。そのような使徒的民族にとって、福音伝道場として都市はある。そうした福音伝道場として都市を規定することにより、インボング、メアミ、カゴリの3族のバイブル・チャーチ信徒は都市の誘惑の内に空しく浮遊流動する非信徒・他信徒・他民族（例えばサイモン・アペがそうである）とは画然として異なる都市へのアプローチを受け取るのである。すなわち、都市における受動的客体ではなく、能動的主体の地位を獲得するのである。

結論：都市文化形成におけるビジネスと福音

宣教が宗教に対する能動的主体的関与であるとするならば、ビジネスは貨幣経済に対する能動的主体的関与である。我々はニューギニア高地人が貨幣経済を受容したのは、ビジネスという能動的関与を通じてであることを見た。すなわち貨幣を入手し、蓄積し、再投資して自ら経済を回転させてゆく動輪となるのがニューギニア高地人が貨幣経済を受け入れるための大前提だったのである。初期においては自分の土地における換金作物栽培や商店経営が、彼らのビジネス活動の内容を成したこともすでに見た通りである。そして、ビジネスという能動的経済行為に、ニューギニア高地人がいかに熱狂的に参与していったかは、1950年に8000USドルであったコーヒー輸出額が、1970年に2018万2000USドルへと驚異的な伸びを示したことや、1971年わずか人口1万5000弱のインボング族の地に215軒の商店が林立した（人口70人に1人の割合、言い換えれば一つの村に3～5軒の商店がしのぎを削っていたことになる）ことから窺える。1970年当時はビジネスは村で行うもので、非熟練労働者が大半を占めていた都市移住者はビジネスの可能性を放棄して、貴重な時と金を浪費している者と見なされた（M. Strathern [1975] p.42; [1972] pp.33-37）。だが独立以降、コーヒー生産が頭打ちとなり、年収が都市の事務職の1カ月の給与とほぼ同等になった頃から、換金作物栽培はもはやビジネスとは見なされなくなった。ビジネスは万人の参与できる活動から、一握りの人間だけが参加できるゲームへと一変したのである。そして、ビジネス参加者の比率が低下するのとは反比例して、ビジネス活動の規模は拡大した。1975年にはもはや年に5000キナ以上稼ぎ出さなくてはビジネスマンとは見なされなくなった（コーヒー農家の年収は約200～300キナであった）。村落部でビジネスマンと見なされるためには、コーヒー・バイヤーかバスやトラックのオーナーとなって、広範囲の農家から金を吸い上げられる者でなければならなかった。

それに比して、人口が密集し、しかもそのほとんど全てが衣食住を貨幣経済に仰がねばならない都市においては、潜在的需要を掘り当てればその創業者利得は莫大なものとなった。

しかも、400万弱と、比較的小さな人口に比して、豊かな鉱物・エネルギー資源を持つ（鉱物・エネルギー産出輸出額は24億5000万キナ：1人当たり614キナ：1994年〈Jarret et al. [1990] p.79〉）パプアニューギニアにおいては、高賃金構造が定着し（工場労働者の平均賃金はタイ・フィリピンの約4倍、インドネシアの約6倍というものであった〈Jarret et al. [1990] p.32〉）、そうした賃金雇用者総賃金の国民総支出における割合はすでに1970～71年段階ですでに48%を占め、その大半が都市に集中していた（Jackson [1981] p.81）。その後の都市化の進行につれて都市における賃金比率は更に高騰し、ほぼ全ての州の1人当たり年平均収入が200～500キナの範囲に収まっていた1983年に、ポート・モレスビー市の1人当たり年平均収入は2115キナ（約2400USドル）に達していた（Jarret et al. [1990] p.81）。ほとんど中進国並みの平均収入である。これは他の都市においても多かれ少なかれ当てはまり、今やこうした高収入を持つ人口が集中する都市においてこそ、巨大なビジネス・チャンスが転がっているのである。1999年、パプアニューギニア第二の都市ラエでパン工場兼食品卸し店を開店したアイエは、瞬く間に毎日平均売り上げ1500キナを計上するに至った⁽⁴³⁾。村のコーヒー農家の年収の5～7倍であり、都市の一般事務職の5カ月分の給与に相当する。牧師や伝道師にとって、都市が迷える子羊の魂を獲得する場であるとするなら、ビジネスマンにとっての都市は、パプアニューギニアの地中に眠る鉱物・エネルギー資源という富を回収する巨大な水路なのである。

いかに政府の要職についていても、雇用されて給与を与えられ、それを衣食住や子弟の教育やレジャーに消費するだけの存在であるならば、彼は本質的に貨幣経済の中における受動的客体に過ぎない。ニューギニア高地のグロカ地方出身のビジネスマンについて報告しているベン・フィニー（Ben Finney）は興味深い例を挙げている。パプアニューギニア政府はパプアニュー

ギニア人小売店主を育成するために、ストレート・パシン・ストア（正直屋）計画というプログラムを創設したが、それに関わっていた2人の商務省の官吏が、自分たちが指導している、教育程度も低い見習い小売店主達が自分達よりはるかに稼いでいるのを見て、職を辞し、自らプログラムの応募者として参加し、あっという間に成功したというのである（Finney [1987] pp. 49-52）。

ある華人商人に言わせると、パプアニューギニアは「ハイリスク・ハイリターン」の国である。パプアニューギニアの都市では未開発の欲望を満足させることのできる商品やサービスを提供すると瞬く間に巨利を博することができる。

こうして、貨幣経済の中での能動的主体であるビジネスマン（企業家）は都市の消費者の抱えている無定形な欲望へと働きかけ、それに形を与えてやり、充足させることにより貨幣を手元に集積する。その意味でビジネスマンとは欲望の開発者にしてその組織者なのである。そうして開発され組織された欲望の中から都市のライフスタイルが生み出され、それを領導する指導的社会階層としてのビジネスマン（企業家群）が立ち現れてくる。

他方、石器的村落から近代的都市という異質な空間へと飛び込んできた都市移入者は、伝統的慣習からの自由を得るのと引き替えに、都市という無機的環境の中で、村落では味わったことのない孤独を味わう。そうした精神的欠如状態を埋めるため、同地域・同民族の出身者達は住居を共にしたり、週末にはビア・パーティーを催したりして文化的孤立の解消を図る。しかし、そうした形での文化的アイデンティティの維持は究極するところ、都市空間という巨大な精神的空白に対応するための受動的なものに過ぎない。そうした都市の空虚に挑んでいるのがキリスト教の福音を宣べ伝えようとする伝道師や説教師達である。ポート・モレスビーの主要な繁華街では街角や公園で辻説法をする伝道者や説教師の姿を常に目にすることができる。そうした伝道者は単独のこともあれば、楽隊を伴った大がかりな集団であることもある。そうした伝道師や説教師を取り巻いて聴衆は熱心に耳を傾ける。それは聴衆

の置かれた精神的欠乏状態を如実に示すものである。ビア・パーティーなどでは得ることのできない精神の内奥に響くメッセージを彼らは得んがために、南緯6度の強烈な陽光と暑熱の中、何十分もじっと立ちつくして伝道の言葉に耳をそばだてているのである。

また、夜は夜で各教会の行う礼拝や集会に夜道の危険を冒して出かけ、牧師や伝道師の説教に耳を澄まし、共に歌い、共に祈る。それによって、精神の深い層での一体感と充足感を味わおうとするのである。そして、クゲコのように自らの精神的支柱となる教義の体系を作り上げ、都市という精神の迷路の中で自らの人生の目標を確立し、それへ向けて真っしぐらに進んでゆく人間達が生まれてくるのである。

このように、キリスト教、ことに聖書原理主義的な福音派・ペンテコステ派教会は、都市の空虚の中で、精神の土壌深く根を下ろした自我の確立に成功した人間達を生み出している。そして、そうした自我は自ずから使徒的構造を持つ。すなわち、自己に与えられ自我の確立をもたらした福音を他者にも宣べ伝えねばならぬという構造である。こうして、福音的自我を確立した者達は他者に向かって精神的に働きかける主体的能動性を獲得する。このようにして、パプアニューギニアの都市において、その精神的中核が形成されつつあるのである。

こうして、物質面においてはビジネスマンが、精神面においては福音的自我の確立者が、都市社会における能動的主体として立ち現れ、成立してまだ日も浅いパプアニューギニアの都市を牽引してゆこうとしているのである。両者はウィンディ兄弟におけるように一体化することもあれば、対立することもある。近年、官庁街ワイガニ地区の近傍にワイガニ・エンターテインメントという一大歓楽施設が華人ビジネスマンによって建てられた。そこにおいては、パレーやスロット・マシーンがあるのは当然のこと、最大の売り物はマッサージである。こうして、ポート・モレスビーにおいては新たに一つの欲望が開発され、定型化されたのである。アイエはマッサージという言葉に想像力を強く刺激され、激しい好奇心を抱きながらも、地獄に至る罪を犯す

ことを恐れ、ワイガニ・エンターテインメントの前に来ると車のスピードを上げ、脇目も振らず疾走する。このように欲望の喚起とキリスト教的禁欲がせめぎ合いながら、共に充進しているのが西暦二千年紀を迎えたポート・モレスビーの現実なのである。

補遺：都市化の比較文化史(ヨーロッパ中世都市との比較において)

20世紀を代表するヨーロッパ中世史家の一人であるアンリ・ピレンヌによれば、「中世の都市は……商人が作り出したものであり」、「若干の場所が都市になったのは、それらの場所が早くから常時商業の中心地になったからである」(ピレンヌ [1970] pp.162-163)。

ヨーロッパに中世都市が発生するのは11世紀のことであるが、そうした中世都市を生み出す牽引車となった「商業の最初の達人達」は「故郷を捨てた者や冒険者の群」の中から現れた(ピレンヌ [1970] p.98)とピレンヌは言う。そして、彼らの成功の本質的な要因は「商売のセンス」であり、彼らは「進取の気性に富んだ人間の間ではぶつかることの珍しくない、あの商業本能を具えた抜け目のない人間であった」(ピレンヌ [1970] pp.100-101)という。

アイエを想起させるこうした人物像はシュンペーターによって、企業家(entrepreneur)と呼ばれた人間類型と一致する。シュンペーターによれば、資本主義システムの起動力となり牽引車となるのはまさしくこうした企業家達である。岩井克人の要約によれば企業家とは「他の人々に先駆けて『新消費財、新生産法や新輸送方法、新市場、新産業組織形態の創造』に成功する」人々「であり、(こうした)革新に成功した企業家は市場支配力を持つことによって創業者利潤を獲得する」(岩井 [2000] p.202)。アイエの場合においては、新消費財とは安価なパンであるスコーンであり、新市場とは首都ポート・モレスビーの中下層民のことであった。そして、アイエのスコーン・ビジネスの成功は岩井の言うように「革新の成功はかならず追随者によ

る模倣を引きおこす。一つの模倣の成功はほかの模倣をさらに容易にし、模倣が群をなして現れる」(岩井 [2000] p.202) 事態をもたらした。「それゆえ、企業家はほかの人々に先駆けるために常に新たな革新の機会を求めて模索し続けなければならない」(岩井 [2000] p.202)。アイエは軍へのパン・スコーンの納入という、それまで華人の手中に握られていた「新市場」を見出した。そして、落札に見事成功した。こうして築かれた軍からの信頼を利用して、アイエは軍の兵舎のある PNG 第二の都市ラエにもパン工場を建設し、軍へのパン・スコーンを納入する一方、ラエの中下層民の間に朝のスコーン食という習慣を広めていった。契約期間の3年は追従者を排除できる軍への納入という、他の企業に対する絶対的優位から生み出される創業者利潤を振り向けるべく、アイエは近々開鉱される見込みの金・銅・ダイヤモンド大鉱山の従業員が集住するであろう鉱山町の建設に先駆けて、従業員の生活物資を供給するスーパーマーケットと鉱山の掘削機械や採掘された鉱石を運ぶ運搬車へのオイルを供給する給油所を併せた施設の建設を計画している。

こうして、常に新たな市場を求めて、「自分の儲けた金を金庫の底に貯め込まずに、……もっぱら自分の商業に栄養を与え、それを拡張するために用いる」(ピレンヌ [1970] p.101) という点では、アイエはピレンヌの描き出すヨーロッパ中世商人と全く軌を一にしている。

こうした資本主義的企業家が新石器時代を脱してわずか40年のうちに出現したことは驚異的ですからある。

しかも興味深いことは、ピレンヌの描く中世商人同様、アイエがキリスト教に深く帰依していることである。ピレンヌによれば、中世市民は「深い、そして熱烈な信仰に心をひたされていた」(ピレンヌ [1970] p.199)。中世市民は「その神秘主義の充溢によって際だっている」(ピレンヌ [1970] p.199) というが、アイエも生まれてくる自分の第二子が男の子であることをバイブル・チャーチの預言者リンビエ・コヤイエの予言によって確信している。

そして、ピレンヌの描く中世商人同様、アイエの宗教的熱情はしっかりと世俗的精神に結びつけられている。家族経営であったアイエの企業は内に一

つの弱点を秘めていた。自身の弟や妹婿による売り上げの横領である。家族の一員であるという甘えと、アイエ一人が儲けを自由に使っているという不平から、売上金に接近できる立場にあった家族の者は誘惑に負けて金を着服してしまったのである。アイエが信頼して、出納を委ねるマネージャーに任ずることのできる家族の者は、バイブル・チャーチの真摯なる信者である異母兄弟のエンバと実弟のクゲコしかいなかった。安心して経営を任せうる家族が2人しかいないという状況が、アイエの企業の桎梏となってその拡大の可能性を妨げていたのである。この絶対的制約に直面したアイエが打った手は、思い切って家族経営を放棄して、他の村や氏族出身の中学卒業者でバイブル・チャーチに深く帰依している若者達をマネージャーとして登用し、訓練するというものであった。登用されたのはアンブル村のナウリガイ氏族のオパ、アンブルに隣接したイミ村のモンガイ氏族のジョシュア、そしてこれもアンブル村に隣り合ったポネモンゴ村のヌンプヌンプ氏族のパトリックの三人である。中学卒であることは英語で交渉ができ、会計に必要な数学的知識の持ち主であることを意味し、バイブル・チャーチの熱心な信者であるということはモーゼの十戒の一つ、「汝、盗むなかれ」を心の中にしっかりとビルト・インされていることを意味する。しかも、三人はカリリポイ部族に属し、アイエはその人格を知悉している。こうして、アイエはそれまでの家族内の信頼関係に換えて、キリスト教的倫理観を根底に据えた全く新しい企業形態を編み出したのである。これはパプアニューギニアにおいてのみならず、世界的に見てもユニークできわめて革新的な産業組織形態の創造である。

こうして、アイエは自らの宗教的情熱を世俗的な企業経営に結びつけることに成功し、契約観念の未発達なパプアニューギニアにおいて、それに代替しうる企業形成の原理を発見したのである。

このように、パプアニューギニアの都市においては、ビジネスと福音が密接に絡まり合いながら、それが起動力となって都市化と資本主義の発展をダ

イナミックに推し進めつつあるのである。

[注]

- (1) 1985年, カウペナ・ミッション・ステーションにおける Renita Bustin へのインタビュー。
- (2) Ballard [1983] pp.185-186に加えて, 1986年, ポート・モレスビーにおける Elepe Korowi へのインタビューも用いた。
- (3) 1985年, 南高地州アンブプル村における Kari Tambi へのインタビュー。
- (4) 1985年, ポート・モレスビーにおける Simon Ape へのインタビュー。
- (5) 1989年, ポート・モレスビーにおける Kinjaro Ape へのインタビュー。
- (6) 1985年, アンブプル村における Simon Ape へのインタビュー。
- (7) 1987年, アンブプル村における Kuku Ape へのインタビュー。
- (8) 1987年, 私はその現場に立ち会った。
- (9) 1989年, ポート・モレスビーにおける Kinjaro Ape へのインタビュー。
- (10) 1989年, ポート・モレスビーにおける Emba Windi へのインタビュー。
- (11) 1989年, アンブプル村における Terry Terema へのインタビュー。
- (12) 1989年, アンブプル村における Tene Tambi へのインタビュー。
- (13) 1991年, ポート・モレスビーにおける Kinjaro Ape へのインタビュー。
- (14) 1991年, ポート・モレスビーにおける Rimbie Tambi へのインタビュー。
- (15) 1992年, ポート・モレスビーにおける Kinjaro Ape へのインタビュー。
- (16) 1992年, ポート・モレスビーにおける Kuku Ape へのインタビュー。
- (17) 1992年, アンブプル村での現場の立ち会い, および, Kinjaro Ape へのインタビュー。
- (18) 1999年, ポート・モレスビーにおける Kinjaro Ape へのインタビュー。
- (19) 1999年, アンブプル村における Elvis Timbo へのインタビュー。
- (20) 1999年, ポート・モレスビーにおける Kinjaro Ape へのインタビュー。
- (21) 1999年, ポート・モレスビーにおける Kinjaro Ape へのインタビュー。
- (22) 1985年, アンブプル村における Aiye Windi へのインタビュー。
- (23) 1999年, ポート・モレスビーにおける Kuleko Windi へのインタビュー。
- (24) 1986年, 南高地州ポネモンゴ村における Torombena Puruno へのインタビュー。
- (25) 1999年, ポート・モレスビーにおける Kuleko Windi へのインタビュー。
- (26) 1999年, ポート・モレスビーにおける Aiye Windi へのインタビュー。
- (27) 1999年, ポート・モレスビーにおける Kuleko Windi へのインタビュー。
- (28) 1999年, ポート・モレスビーにおける Aiye Windi へのインタビュー。
- (29) 1999年, ポート・モレスビーにおける Aiye Windi へのインタビュー。

- (30) 1999年, ポート・モレスビーの Aiye Windi との電話インタビュー。
 - (31) 1999年, ポート・モレスビーにおける Kuleko Windi へのインタビュー。
 - (32) 1999年, ポート・モレスビーにおける Aiye Windi へのインタビュー。
 - (33) 1999年, ポート・モレスビーにおける Kuleko Windi へのインタビュー。
 - (34) 同上。
 - (35) 1999年, ポート・モレスビーにおける Aiye Windi へのインタビュー。
 - (36) 1999年, ポート・モレスビーの Aiye Windi との電話インタビュー。
 - (37) 1999年, ポート・モレスビーにおける Aiye Windi へのインタビュー。
 - (38) 1999年, ポート・モレスビーにおける Kuleko Windi へのインタビュー。
 - (39) 1999年, アンブプル村における Pinje Terumu へのインタビュー。
 - (40) Post Courier1996年11月19日号参照。
 - (41) Post Courier1996年12月24日号参照。
 - (42) Post Courier1997年6月13日号参照。
 - (43) 2000年, ポート・モレスビーの Aiye Windi との電話インタビュー。
- (付記) 本文中の人名については、公人を除き仮名とした。

〔参考文献〕

〈日本語文献〉

岩井克人 [2000] 『二十一世紀の資本主義論』筑摩書房。

熊谷圭知 [1994] 「ポート・モレスビーにおける都市移住者の居住とセグリゲーション」(熊谷圭知・塩田光喜編『マタンギ・パシフィカ』アジア経済研究所)。

ピレンヌ, H. (佐々木克巳訳) [1970] 『中世都市』創文社。

〈外国語文献〉

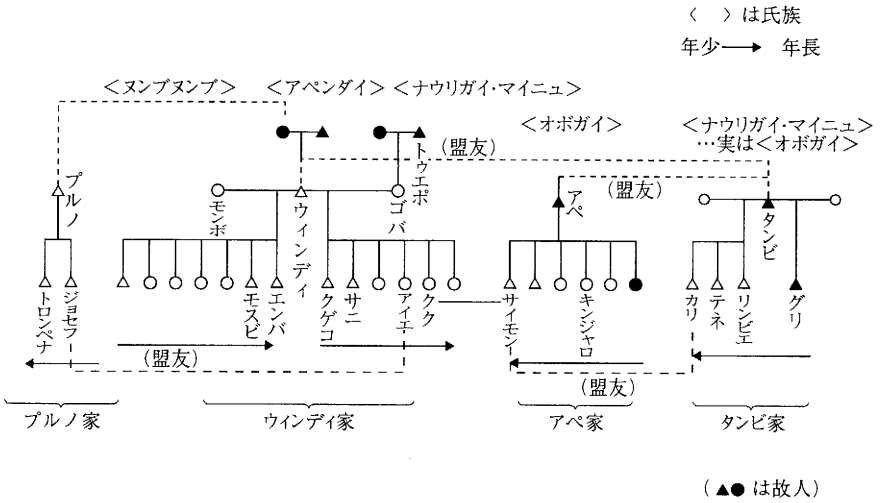
Ashton, C. [1978] “The Leahy Family,” James Griffin ed., *Papua New Guinea Portraits: The Expatriate Experience*, Canberra: Australian National University Press.

Ballard, J. A. [1983] “Shaping a political arena: the elections in the Southern Highland,” David Hegarty ed., *Electoral Politics in Papua New Guinea: Studies on the 1977 National Elections*, Port Moresby: University of Papua New Guinea Press.

Finney, B. R. [1973] *Big-Men and Business: Entrepreneurship and Economic*

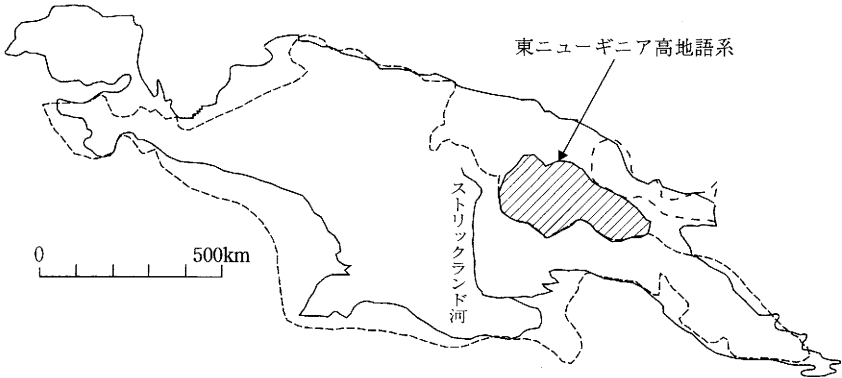
- Growth in the New Guinea Highlands*, Honolulu: University Press of Hawaii.
- [1987] *Business Development in the Highlands of Papua New Guinea*, Honolulu: University Press of Hawaii.
- Gitlow, A. L. [1947] *Economics of the Mount Hagen Tribes, New Guinea*, Seattle: University of Washington Press.
- Jackson, D. [1981] *The Distribution of Incomes in Papua New Guinea*, Port Moresby: National Planning Office.
- Jarret, F. [1990] *Papua New Guinea: Economic Situation and Outlook*, Canberra: Australian International Development Assistance Bureau.
- Kelly, R. J. [1960] "Ialibu Patrol Report 1959/60, No.8," typescript, Port Moresby: National Archives of Papua New Guinea.
- Mennis, M. R. [1982] *Hagen Saga: The Story of Father William Ross, Pioneer American Missionary to Papua New Guinea*, Port Moresby: Institute of Papua New Guinea Studies.
- Oram, N. [1976a] "Port Moresby," Richard Jackson ed., *An Introduction to the Urban Geography of Papua New Guinea*, Port Moresby: University of Papua New Guinea Press.
- [1976b] *Colonial Town to Melanesian City: Port Moresby 1884-1974*, Canberra: Australian National University Press.
- Paypool, P. [1976] "Ialibu-Pangia Electorate," David Stone ed., *Prelude to Self-Government*, Canberra: Australian National University Press.
- Shiota, M. [1992] "Papua New Guinea at Turning Point," Mitsuki Shiota and Nimal Fernando eds., *Papua New Guinea at Turning Point*, Tokyo: Institute of Developing Economies.
- Sisley, P. N. [1966] "Ialibu Patrol Report No.8/1965-1966," typescript, Port Moresby: National Archives of Papua New Guinea.
- Strathern, M. [1972] "Absentee Businessmen: The Reaction at Home to Hageners Migrating to Port Moresby," *Oceania*, Vol.43, No.1, pp.19-39.
- [1975] *No Money on Our Skins: Hagen Migrants in Port Moresby*, Port Moresby: New Guinea Research Unit of the Australian National University.
- Wurm, S. A. ed. [1975] *Papuan Languages and the New Guinea Linguistic Scene*, New Guinea Area Languages and Language Study Vol.1, Canberra: Australian National University.
- ed. [1978] *Languages of the Highlands Province, Papua New Guinea*, Canberra: Australian National University.

付図1 主要登場人物系譜・盟友図 (2000年現在)



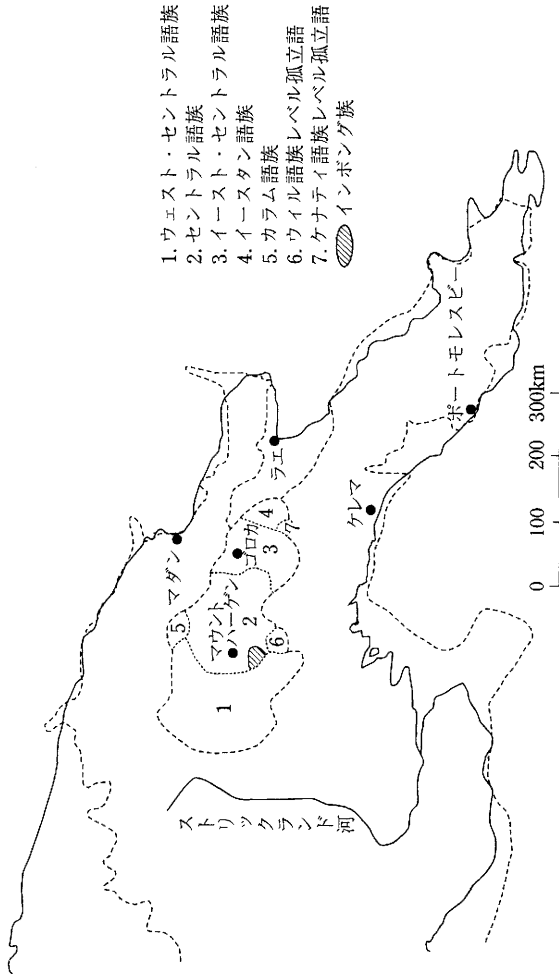
(出所) 筆表作成。

付図2 トランスニューギニア語門とそこにおける東ニューギニア高地語系の位置



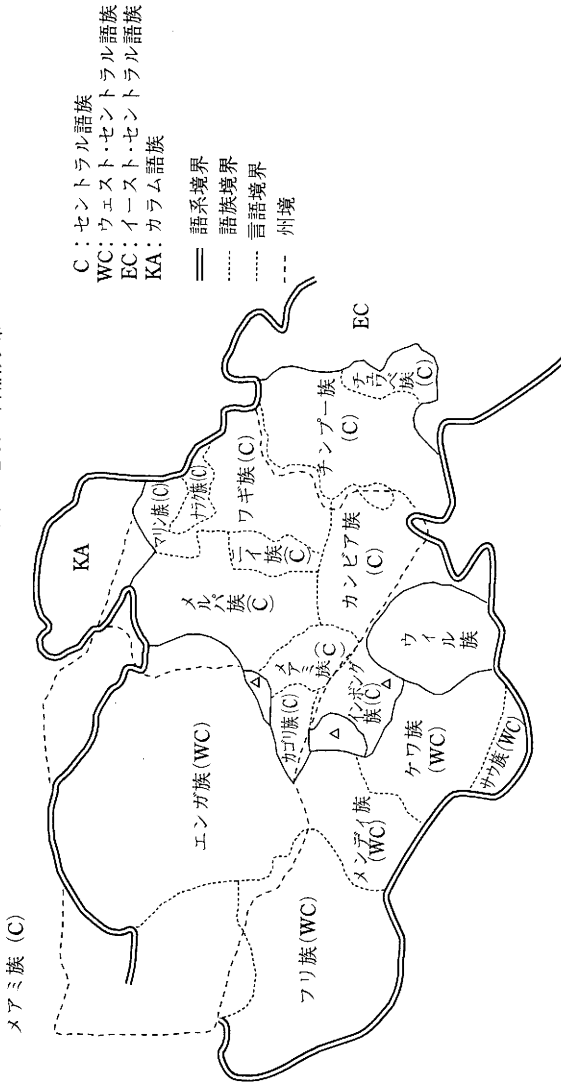
(出所) Wurm ed. [1975] により筆者作成。

付図3 東ニューギニア高地語系とそれを構成する語族



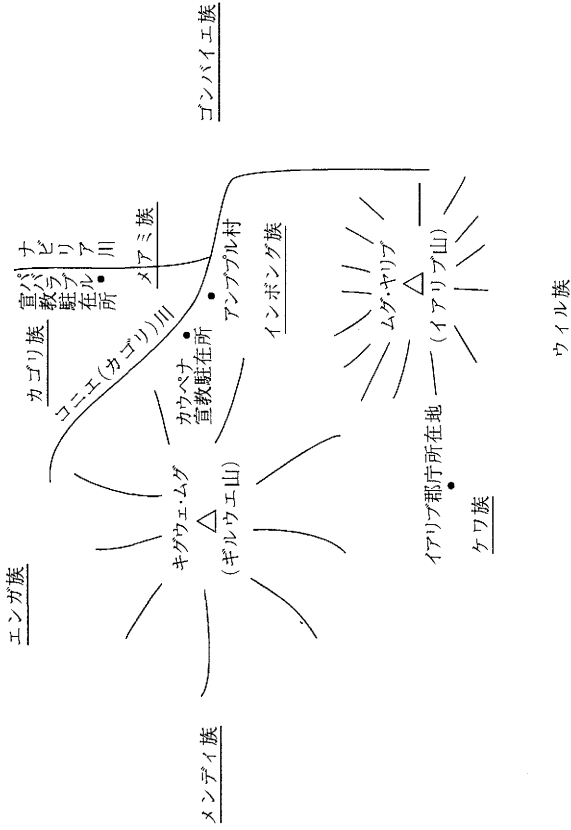
(出所) Wurm ed. [1975] により筆者作成。

付図4 インボング族周辺地域の言語分布



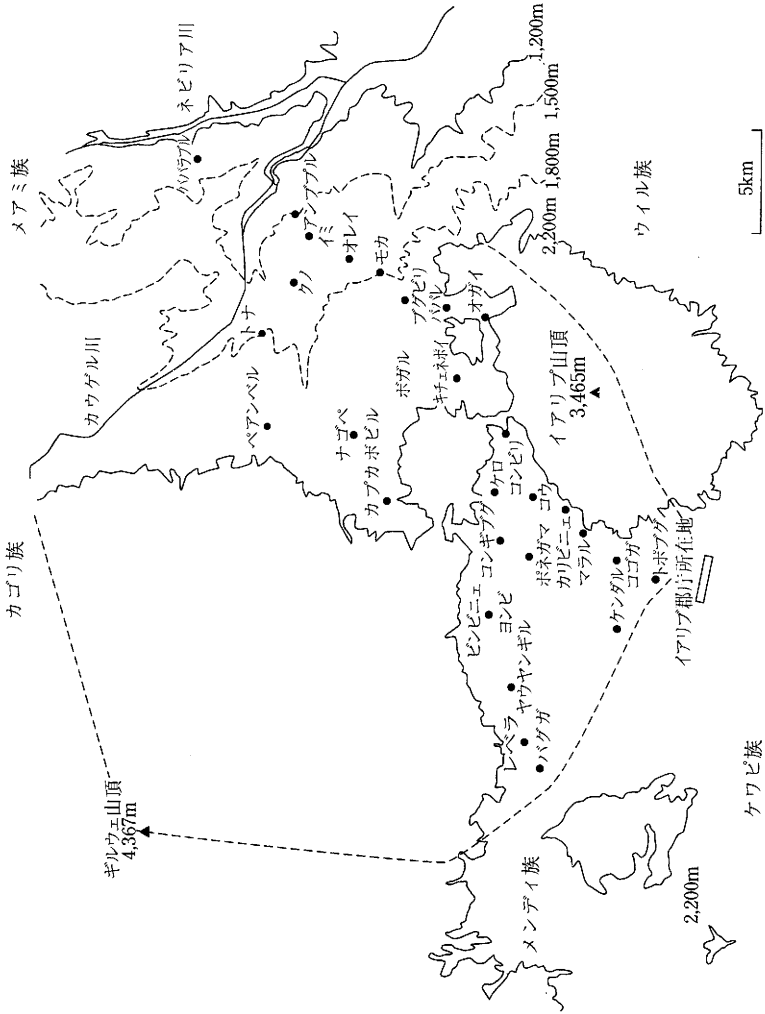
(出所) Wurm ed. [1978] により筆者作成。

付図5 インボング族と周辺民族



(出所) 筆者作成。

付図6 インボンング全図



(出所) Wurm ed. [1978] により筆者作成。

付表1 インボング・ビジネス史

本章の背景となる出来事	インボングの地における社会変化	サイモン・アペのライフ・ヒストリー	ウィンディ兄弟のライフ・ヒストリー
1932 レイ兄弟, 初めてニューギニア高地へ入る。			
1933 レイ兄弟, メアミ, インボングの地を通過。			
1933 レイ兄弟, クタで金採取開始。 (本格的産出は1950年代に入ってから)			
1935 ニューギニア高地閉鎖。			
1935 マウン・ハーゲンに統治駐在署開設。			
1942 日本軍ニューギニア侵攻。 ラバウル, ウイワク, レイ, マダン, フロロを攻略。	1942 モゴイ, オガイエのカーゴ・カルト	1942 J・L・テラー, モゴイ・オガイエを訪ねインボングの地へ	1942 テラー, 慌ててマウン・ハーゲンに帰還。
1942 白人民間人, ニューギニア高地より撤退。代わっ	1942 モゴイ・オガイエのカーゴ・カルト破れ, インボングの地にモゴイ氏族対エガイ・マガイ+オガイ・ウエリヤリ連合軍の大戦争起こる。モゴイ敗北し, アンブアルへ逃げ込む。		

1945	戦後初のセンサスがネビリア河一帯のメアミ族の地で行われる。	アンブアル村で内紛。ナウリガイ氏族、クリガイ氏族をカウゲル河の北に放逐。	
1948	ダン・レイ、クタに戻って砂金採取再開。		
1948	G.T. バスティーン、宣教準備のため、ネビリア、カウゲル河谷を訪ねる。		
1949	バスティーンら、メアミの地パパラブルに宣教駐在所を開設 (East & West Indies Bible Mission)。		
1950		バスティーンら、アンブアルに宣教駐在所開設を図るが部族戦争のため撤退。イアリブ統治駐在署設置開始。	
1953			
1954 ~1955		インボンダ族の戦争状態、オーストラリア統治府に鎮圧され、バックス・オーストラリアーナ (オーストラリアの平和) がもたらされる。	1954 アベ、村落警官に任命される。
1957	ダン・レイ、メアミの地にコーヒュー・プランテーションを拓く。		

本章の背景となる出来事	インボングの地における社会変化	サイモン・アベのライフ・ヒストリー	ウォンダイ兄弟のライフ・ヒストリー
1958	バイブル・ミッシオン、カウペナに滑走路を造る。		
1959	バイブル・ミッシオン、カウペナに小学校を開設。この頃、インボングの地に貨幣の流通が始まる。		
1960	インボングの地で High-lands Labour Scheme 開始。若者ら、プランテーション労働のため、ラバウル等へ出て行く。		
1960～	インボングの地でコーヒー栽培増熱、広がる。		
1962	ビジネス熱広がる。		
1964	衆議院第1回総選挙と地域政府評議会始まる。		
1965	バイブル・ミッシオン、4軒の万屋を建てる。		
1966	万屋開店熱広がる。インボング族保有の万屋3軒→12軒に。	1966 サイモン・アベ、イアリののカプアチン派経営の小学校に入学。	
1967	インボングの村々で小学校開設の要求、高まる。ペラカイ・テイー・アランテーション、白人入植者によって拓かれる。イアリーブ郡の出稼者1324名（人口1万5811人）、万屋27軒に（インボング25軒、その他2軒）。	1967	アイエ&エエンバ・ウィンダイ生まれる。

1968	<p>土地に対する補償金の要求高まる。 プロックの茶栽培スタート。</p>
1969	<p>カウゲル河谷の貨幣経済、インボング他地域に比べ進展。 バイブル・ミッシヨンの小学生、父兄らに独立反対を認得。 ペラガイ・ディー・ブランテーシヨン110名雇用(半数が周辺村から)。 ハイランズ・ハイウエイ、カウゲル河に到達。架橋開始。</p>
1969	<p>ウォーレン・グライミー(モカ村)、インボング一帯で最も抜きん出たビジネスマンと評される。 ○ハイウェイ沿いにガソリン・スタンド用に土地リースを申請 ○カウペナに半エーカーのコーヒー園 ○トヨタ車で運送業 ○モカ村に万屋を経営 ○モカ村に牛放牧場をつくる</p>

本章の背景となる出来事	インボングの地における社会変化	サイモン・アペのライフ・ヒストリー	ウィンディ兄弟のライフ・ヒストリー
	1969		
	1970		
	1971		
	1972	1972	サイモン・アペ、タリ中学に進学。

1969
 バイブル・ミッジョン、イミ料に製材所をスタートさせる。
 カウゲル河の南、インボング族の地でハイウェイ敷設始まる。
 政府、ギルウェ山伐採権購入開始。
 ハイウェイの用地買収進む。
 万屋215軒に達する。
 インボング (イアリア郡)

1972
 公立小学校 4
 ミッジョン系小学校 6
 第3回衆議院選挙、行われる。
 グライイミー・フレナ (25歳) 立候補、落選。
 カウベナナクリスチャイン指導者養成学校 (CLTC, 4年間) → 通信教育で Form II 終了 → バイブル・ミッジョン・マナージャー (1968〜) → バイブル・ミッジョンのディレクターに。

1972
 第3回衆議院選挙行われる。
 独立派が連立内閣形成。

南高地県でも、この頃から中学卒以上の教育を受けた若者が公務員、地域評議会書記、ミッジョン牧師に続々と就任。

1974	<p>アンソニー・テモ (県職員)、メンデイの自クラの土地の補償請求運動を始める→テモ、アマネ・アソシエーションを結成→タリに転勤。 テモはトラックを所有し、運送業にも従事。</p>	1974	<p>アペ、ゴゴブゲ村を追われ、アンプアルに移住。ナウリガイ氏族に土地を与えられる。</p>	1974	<p>アイエ&エエンバ・ウインデイ、カウペナ小学校入学。 サニ&モテイ・ウインデイ生まれる。</p>
1975	PNG 独立	1976	<p>サイモン・アペ、マダン国立高校に進学。</p>	1975	<p>クク・ウエンデイ、メンデイ中学に進学。</p>
1977	<p>PNG 独立後第一回国会議員選挙 グライミー・ワレナ、インボング選挙区で当選。 ウィワ・コロウイ、州選挙区で当選。</p>	1978	<p>サイモン・アペ、マダン国立高校を卒業。西高地州の衛生官に採用される。</p>	1979	<p>クク・ウインデイ、メンデイ中を卒業。</p>
1978	<p>ウィワ、厚生大臣に就任。 バイブル・チャーチとグライミー・ワレナ、イミ村にピーチウッド製材所建てる。</p>	1980	<p>サイモン・アペ、クク・ウインデイと結婚。 (婚資：ブタ3頭+300キナ)</p>	1980	<p>クダコ・ウインデイ生まれる。 アイエ&エエンバ・ウインデイ、小学校卒業。エンバ、イアリブ中学に進学。</p>
1981	<p>バイブル・チャーチ、グライミー・ワレナ、株主に。</p>	1981		1981	<p>アイエ、パバラブルのバイブル・インスティテュートに進学。</p>

本章の背景となる出来事	インボングの地における社会変化	サイモン・アペのライフ・ヒストリー	ウィンディ兄弟のライフ・ヒストリー
1982	PNG 第2回会議員選挙	1982 サイモンの長男、ケレリ誕生。	
1982	グライミー・フレナ、連続当選。		
1984	ワイワ、フランシス・ブサルに負け、落選。 イミ村にコーヒー工場でさる。	1984 サイモンの次男、ウェイエ誕生。 サイモン、銃器購入を認められず、衛生官を辞任。村に帰る。	1984 エンバ、イリアプ中学を卒業。ポート・モレスビーのPTC (電電公社) に就職。
1985	イミ村に製茶工場できる。 アンブブル村のカウソンツル・クンビエ+クリガイ氏族、マガリを行う。	1985 サイモン、大学 (UPNG) に入學。塩田と出会う。 サイモン、ククをポート・モレスビーに呼ぶ。	1985 アイエ、パバラブル中学を卒業。ピーチウツド製材所に雇われる。
1986	グライミー・フレナ、大臣に。 ナウリガイ氏族+ウインデイ家、盛大なピツグ・キルを行う。	1986 サイモン、淳気をククになじられ、ククをどつき、クク、背中を痛める。サイモン、ククを村に送り返す。	
1987	アンブブル村の衆、土地賠償請求をめぐって、ピーチウツド製材所に押しかける。 サイモン、グライミー・フレナにピーチウツドでの土地賠償の助力を乞うが辱められ、報復を誓う。	1987 サイモン、アンソニー・テモに接触し、テモのキヤンペーン・ミニニスター (後援会長) に。	1987 サニ、メンディ中学に進学。アイエ、ラエ・テクニカル・カレッジのアカウンタントコーススに入學。

1987	<p>テモ、運輸大臣に。サイモンを大臣秘書官に。銃が普及し始める。</p>	1987	<p>サイモン、ロバート・サクリングのテイスコの上手のアパートに入る。サイモン、村の若い衆(リンビエ、タケス、テネス)をポート・モレスビーのマカナ職業学校に入れる。サイモン、クリガイ女をタイピスト・スジュールにやりながら同棲。サイモン、弟のキンジャロとケレリ、ウェイエを連れ出し、ポート・モレスビーに。サイモン、村落治安判事の〈テギ〉アンプを訪ね、ククとの離婚を打診。</p>	1988	<p>クク、ポート・モレスビーへ降り、サイモンと暮らす。</p>
1988	<p>テネ・タンビ、アンプブル村にピアハウスを開く。</p>	1989	<p>サイモン、ククの腹を蹴り、クク入院。クリガイ女、サイモンのもとから去り、サイモン、悔い改めてククとペンテコスト派の教会へ。</p>	1989	<p>ウインディ老人、チフスにかかり(弟だと思いつむ)、モレスビーの病院へ。アイエ、ラエ・テクニカル・カレッジ卒業。ハーゲン・ダンロップに就職。</p>
1989	<p>テモ、リペノム道路工事開始。アンプブル村の衆、大量に雇わる。</p>	1990	<p>サイモン、古着屋を始め。Loneka Pty. Ltd. 設立。</p>		

本章の背景となる出来事	インボングの地における社会変化	サイモン、アペのライブ・ヒストリー	ワインディ兄弟のライブ・ヒストリー
	1991 トゴパからメンディまで のハイウェイを舗装する コリヤ・コンゴノ始まる。	1991 サイモンの古着屋3店に。 更にラエ、ラバウルにも 新店舗。 サイモン、白人1人、バ アア人2人の暗殺者に狙 撃される。	1991 アイエ、サイモンと呼ば れポート・モレスビーに。 古着屋に勤めながら大学 予備科入学。 サニ、中学卒業。村に帰 る。
	1992 PNG 第4回総選挙。 テモ再選。しかし、政權 交代し、野党に回る。 カリ・タンビ、サイモン のバス・ビジネスから第 二夫人の婚資にすべく、 売り上げを着服。	1992 サイモン、投票前夜に (クリガイ)ゴアイエの 娘とねんごろに。 サイモン、クリガイの娘 と結婚。婚資に1万キナ と20頭のアタ。	1992 エンバ、PTCを辞め大 学入学。 サイモン、サニをポー ト・モレスビーに伴う。 クク怒り、アイエに2.5 万キナを銀行から引き出 させ、アイエ、親友のジ ョセフ・ブルノのもとに 送る。
	タンビ老人、十数年にわ たる密通発覚。賠償金を 請求され、サイモンの助 けを乞うが拒絶される。	サイモン、激怒し、銃を 放ってワインディ兄弟を 追い出す。	ワインディ兄弟、路上生 活をする。兄かねたエレ ベ・コロウイ、4人を自 宅にひきとる。 サニ、サイモンの店を偵 察中にケケベンゲ・アペに 背中をどややされる。サニ、 翌日店を打ち壊しに。
1993 ポート・モレスビーのマ ーケットで古着売り始ま る。	1993 サイモンの古着売り上げ 急落。	1993 サイモンの古着チェーン、 ラバウル支店閉店。	1993 アイエらワインディ兄弟、 ポート・モレスビーに万 屋を開く。 1994 アイエ、店をもう一軒、 ホホラ地区に持つ。

<p>1996</p> <p>ウィワ、コロウイ総督、国民に改悛を訴え、「膝折り作戦」開始。バプアニューギニア中のキリスト教徒に広まる。</p> <p>1997</p> <p>バプアニューギニア第4回総選挙。候補者の写真の横にイエス・キリストの絵姿を書いたポスターが続出。ビル・スケート、首相となり、スケート政権発足。ウインディ兄弟の成功を見て、ブレット・ビジネスに続々と参入者現れる。キナの価値下落し、インフレ昂進。</p>	<p>1995</p> <p>サイモンの古着チェーン、ラエ支店閉店。</p> <p>1996</p> <p>アンブブル村の指導者タンピとサイモンの父アペが同時に邪術に倒れ、二人は同日同刻に死す。</p> <p>1997</p> <p>インボング小選挙区において、ピーター・ペブール当選。テモ落選。コロワ・ポケア、キリスト教民主党を創設し、健闘するも落選。</p> <p>1998</p> <p>インボング族の東隣り、カンビアの地に金・銅・ダイヤモンドの大鉱脈発見。だがカンビア族とババラブルのメアミ族の間に戦争勃発。鉾山会社の採掘、延期。</p>	<p>1995</p> <p>サイモンの古着チェーン、ラエ支店閉店。</p> <p>1996</p> <p>サイモンの古着チェーン、グレフ支店(2店)閉店。</p> <p>1997</p> <p>サイモン、60万キナ(7500万円)を投じ、ポート・モレスビー北東選挙区にて華々しい選挙活動をするが落選。</p> <p>1998</p> <p>クデコ・ウインディ、ポート・モレスビー・グラーマ・スケールを卒業。アイエのゲレフ・ベーカーリーのママネージャー見習いを始める。ニア防衛軍のマレーン兵舎へのバン、スコーン納入権落札。</p>	<p>1995</p> <p>アイエ、ゲレフ地区でスコーンを主とするパン工場を開く。ポート・モレスビーの中下層民の潜在需要にマッチし、大繁盛。</p> <p>1997</p> <p>アイエ、ワイガニ地区にもう一軒、パン工場を開き、異母兄弟のエンバに経営を委ねる。</p> <p>1998</p> <p>クデコ・ウインディ、ポート・モレスビー・グラーマ・スケールを卒業。アイエのゲレフ・ベーカーリーのママネージャー見習いを始める。ニア防衛軍のマレーン兵舎へのバン、スコーン納入権落札。</p>
--	---	---	---

<p>1999 本章の背景となる出来事 ビル・スケークト、外交・経済の失策により退陣。代わって、メケレ・モロータ政権に。パプアニューギニア・バイブル・チャーチ50周年記念祭をポート・モレスビーにて開催。</p>	<p>インボングの地における社会変化</p>	<p>1999 サイモン・アペのライフ・ヒストリーの古着チェーンのグレフ本店、閉店。</p>	<p>1999 ウインディ兄弟のライフ・ヒストリー アイエ、アンブプブル帰省中に邪術に遭い、ポート・モレスビー総合病院の手術で一命をとりとめる。 アイエ、改称し、バイブル・チャーチに入信。 アイエ、防衛軍と新たな納入契約を結び、PNG第二の都市ラエにパン工場を開く。 アイエのラエ工場、隣く間に成功を収める。</p>
---	------------------------	--	--

(出所) 筆者作成。